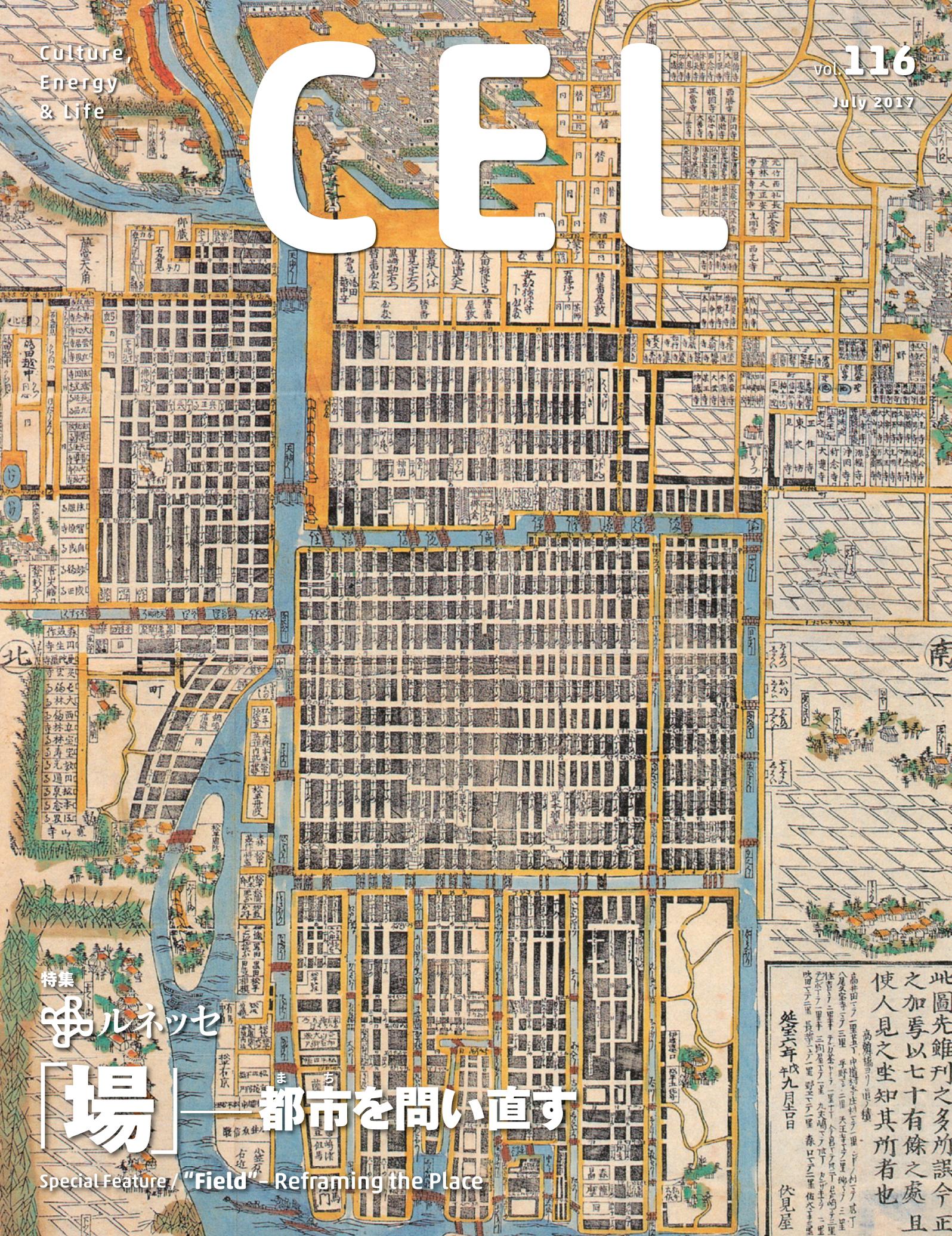


# CEL



特集  
ルネッセ

## 「場」

## 都市を問い直す

Special Feature / "Field" Reframing the Place

此圖先雖刊之多所誤今正  
之加辱以七十有餘之處且  
使人見之坐知其所者也  
高橋橋ヨリ東ノ橋  
高橋田ニテ一里五丁中橋村ニ住ルニテ一里ノリテ成丁  
八尾金寺ニテ三里 手野ニ 三里 天王寺ニテ一里ノリテ三里  
住吉ノ二里半 芝田金寺ニテ一里十丁今島ノ下ニテ一里ノリテ三里  
乙水ノ一里半 三崎金寺ニテ一里 九夫崎ニテ一里ノリテ三里  
吹田ノ二里 長等ノ一里野野子ニテ一里 森ノ一里 佐々木ノ一里  
筮六年九月吉日 伏見屋



- 対談  
 02 **日本的な価値を取り戻し、再起動へ**  
 ——ルネッセ特集にあたって  
 松岡正剛 [㈱編集工学研究所所長] ×  
 池永寛明 [大阪ガス(㈱)エネルギー・文化研究所所長]

特集

**ルネッセ「場」**——**まち**を問い直す

Special Feature / “Field” - Reframing the Place

- 対談  
 12 **震災が問う社会と「場」**  
 谷直樹 [大阪くらしの今昔館館長] ×  
 三浦史朗 [構匠、(㈱)三角屋取締役]
- 対談  
 18 **江戸に学ぶサステナブルな都市のあり方**  
 アズビー・ブラウン [金沢工業大学シニアアドバイザー] ×  
 板東洋介 [皇學館大学准教授]



- 対談  
 24 **五感でまちを捉え直す**  
 島原万丈 [LIFULL HOME'S 総研所長] ×  
 加藤政洋 [立命館大学教授]



- 30 **江戸時代の学びと教え**  
 沖田行司 [同志社大学教授] = 文

- 36 **外からの目で上方文化の本質に迫る**  
 ——「大阪・和の暮らしを体験する会」成果報告より  
 鶴見佳子 [文筆家] = 文

- 44 **都道府県と旧令制国では、地域の特性が際立つのはどちらか**  
 ——最新のマーケット・データの比較分析から  
 林裕之 [㈱野村総合研究所主任コンサルタント] = 文

- [連載]  
 48 **ことばと場**  
 新しい方言の生成——行カンカット・飲マンカットの生まれるところ  
 大西拓一郎 [国立国語研究所教授] = 文

- 52 **大阪はつながっていく**  
 柴崎友香 [作家] = 文

- [書籍案内]  
 54 **「場」を問い直すための10冊**

[CELからのメッセージ]  
**その場所に、なぜそれがあったのか?**  
 池永寛明

表紙・扉 / 「新板増補大坂之図」。1678年刊行の大坂全図。水路を張り巡らした「水の都」大坂のまちのあり方がわかる。裏表紙 / 「繁栄御江戸絵図」(部分)。1867年刊行の江戸全図。江戸城を中心に武家地、町人地、寺社地が広がる。いずれも『地図で読む江戸時代』(山下和正著、柏書房)より

情報誌『CEL』は、  
 116号から118号まで  
 「ルネッセ(再起動)」をテーマに、  
 日本社会の抱える問題への  
 新たな視点を提起する  
 連続特集企画をスタートします。  
 「ルネッセ(再起動)」とは、  
 ラテン語の「再び(ren)」と  
 「実在する(esse)」を組み合わせた造語です。  
 産業構造が変化し社会の流動化が進むなか、  
 従来の制度・ルールと現実とが不適合を起こし  
 社会の諸相にさまざまな課題が生じています。  
 私たちの生活文化の基盤「都市」に  
 蓄えられてきた価値を掘り起こすこと、  
 「ルネッセ」させることで、  
 未来へつなぐ価値づくりを目指します。



対談

〔株編集工学研究所所長〕

松岡正剛

Matsuoaka Seigou

〔大阪ガス株式会社エネルギー文化研究所所長〕

池永寛明

Kenaga Hiroaki

# 日本的な価値を 取り戻し、再起動へ

## ——ルネッセ特集にあたって

日本的な価値は、古来、我々の生活文化の基盤であった都市に埋め込まれている。連続特集企画「ルネッセ (Renesse)」では、古今東西の情報から日本を日本ならしめる編集法を研究してきた松岡正剛氏をスーパー・アドバイザーに迎え、日本的な「本質」を再起動させ、それを現代・未来につなげるべく道筋を縦横無尽に提示する。

栗林成城=撮影

## 都市に埋め込まれた 本質を掘り起こし、再起動へ

池永 情報誌『CEL』は創刊30周年を迎え、今号から3号を、「ルネッセ (Renesse)」をテーマに日本のこれからの考えていきます。「ルネッセ (再起動)」とは、ラテン語の「再び (ren)」と「実在する (esse)」を組み合わせた造語です。

地域社会に関わるなかで感じることがあります。江戸時代以来「ないものからつくりつづける」東京に対して、明治以来「なくしたことを隠しつづける」大阪という地域構造の課題です。

さらに日本は少子高齢が進み、社会・産業構造も大きく変化しているにもかかわらず、価値観や制度や仕組みが従来のものであるため、諸相に適合不全が顕れています。

私たちの生活文化の基盤「都市」にある本質を過去より掘り起こし、現代・未来へとつないでいくことができないだろうか。古来より都市が形成された近畿圏には日本的なる「本質」が育まれ存在しているはずなのに忘却している。この本質を「ルネッセ (再起動)」させることで、都市に新たな価値を創造できないかと考えています。

その先駆けとして、「近畿における消費行動の分析」(44頁)を行いました。近畿圏の動きを現在の行政区分と旧令制国区分で比べてみると、大阪府より摂津国と捉えた方が地域の人の行動や消費構造が鮮明になりました。「ルネッセ」的に考えていくことが必要ではないかと考えています。

松岡 その視点はおもしろいですね。先日、関西のある銀行関係者と話をする機会がありました。池永 同じ問題意識を感じました。

池永 新しいものに対する受容性が低いという実

態も浮き彫りとなり、これも近畿圏の地盤沈下の一因かもしれません。首都圏や中部圏に比べてスマホやeコマースの利用が遅れています。かつてはどこよりも新たなものを受け入れ、スピーディに自分のものにしていたはずですが。阪神・淡路大震災を体験しているにもかかわらず地震保険の加入率が低い。未来を考えるよりも短期的な行動をとるという傾向が強い。

松岡 それを聞いて思い浮かぶのは、江戸後期の儒学者海保青陵の『稽古談』にある「凡大坂ノ利ニ精シキハ、浅キコトニアラズ」という言葉です。利に精しいのはつまらないことではないし、簡単なことでもないという意味ですが、いまの大阪は「利に対する編集力」が弱くなっているのではないかと。また大阪の枠を外れると、すぐにあきらめてしまう。どこで間違ってしまったのでしょうか。

池永 情報と情報を組み合わせ、新たなものを創り出す力が弱ってきているのではないのでしょうか？ 今、インバウンドが伸び、関西空港から大阪に入り京都、奈良に移動される。かつての「天下の台所」の水路ネットワーク構造とよく似ています。しかし、この現象の本質を踏まえなければ、一過性で終わってしまう。

松岡 いろいろな事象、チャンスの兆しは起こっているのに、長続きしないのはなぜかという問題です。その理由のひとつに、大阪では好きなこと、自由なことができるはずだという錯覚を日本中がしていたかもしれません。インバウンドも、東京であれば国が予算をつけて観光客が増えるように計画したでしょう。ところが、大阪は任せていても大丈夫だろうと思ってしまう。

大阪らしい先駆性を維持できていないのは、パトロネージュの文化が切れてしまったことも原因

でしょう。過去には豪商が懐徳堂や適塾をつくり、日本中の若者に門戸を開き人づくりをした。とはいっても、余裕がないと文化資本は生み出せないし、シードマネーもつくれません。大阪にそれができないならば、第三の方法を見出せばいい。やんちゃなもの、ハイブリッドなものなど、他では複合しないような組み合わせを大阪で起こせばいい。近松門左衛門の「曾根崎心中」のように、心中事件と人形浄瑠璃を組み合わせる発想は大阪でしかありえなかった。かつてあったそういうものを取り戻す必要があるでしょうね。

## 新たな異なる情報を編集し、 モデル化してきた大阪

池永 先日、「大阪くらしの今昔館」で、外国の方を招いて上方文化体験プログラムを行いました(36頁)。自国との違いに気づく一方、自国との共通項を見たという外国人が多く、まさに文化の本質で「ルネッセ」の原点になると考えています。

一方、私たちが自らの文化を説明できなくなってきたということにも大阪の弱体化を感じています。松岡 それは大阪だけではなく、日本全体が抱える問題でもある。日本人が日本文化を説明できていないのです。まず大阪が率先して、上方の文化経済や歴史を説明していくべきです。

なぜかといえば、かつての都としての京都、貿易港としての神戸、古都としての奈良、壬申の乱を抱えた滋賀、こういった地理・時間軸のなかで商都大阪が大きな役割を果たしてきました。海保青陵のいう「利」は、いわば実学です。そこを实地でやれたのは、大阪だけでした。最先端の外からの情報を編集し、大阪モデルをつくり先頭を切ることができたのは大阪だったのです。



自身が所長を務める編集工学研究所内の松岡氏。所内には日本文化に関わる書物が百科全書的に網羅されている。

古代に難波京があり、遣唐使がそこから出て文化の入り口となり、竹内街道を越え飛鳥京へとつながるパイプがあった。中世では渡辺党が上町台地をつくりあげた。大阪は上町台地にできた街だから、まず上町台地型の摂津・船場文化と畿内の各都市文化、歴史の違いを説明できなければいけません。

私は懷徳堂が好きなのですが、5人の豪商がつくりあげてからの三宅石庵時代は素晴らしいけれど、

ど、中井竹山時代に権力にへつらうようなことが起きた。現代も、おもしろいことをやっても、後には評判が悪くなったり、余所に出ていたりする。こうなってしまうことを、もう一度考え直さなければいけません。

池永 私は、大阪が「大阪のためのものだ」と思った瞬間から大阪が弱体化したのではないかと、いう仮説を立てています。

松岡 成功した早い段階で編集力をきかせ、モデ



過去から現在そして未来まで、日本や近畿の文化をめぐる対談は2時間に及んだ。

ル化を行い、外に展開するところまでができれば、大阪も成功していたのではないのでしょうか。たとえば吉本興業は、じつくりと大阪で吉本モデルをつくりあげてから全国に展開して成功しました。芸人を続々と、全国のメディアや劇場にぶつけて、日本全体のタレントにしていく。大阪発のものは吉本以外にもありますが、モデル化ができていない段階で全国展開しようとしたのでうまくいかなかった。せつかくできつつあるものを仕上げず手を抜いて、「利に対する編集力」を弱くさせている。大阪の企業は、外に出す前に、「大阪モデルにしてから外に展開する」という大阪合意のようなものをつくった方がいい。

### 産業構造の変化と上方文化の衰退

池永 編集し、モデル化することが弱くなったのは、大阪市内に大学がなくなったことも大きいと考えています。

松岡 それはどうしてだったのでしょうか？

池永 高度経済成長時代、大阪市域での工場増加に伴う人口増加が問題になり「工場等制限法」ができたのですが、それは工場だけでなく大学の施設・増設をも制限するものでした。そして大阪市内に大学が減った。学生が減り学びの場がなくなり、ビジネスだけの場になってしまった。

松岡 商都大阪の失敗ですね。イギリスが、ランカスターやバーミンガムなどの工業都市の大学を大事にしてきたのとは違う。イタリアのミラノやローマも、アルマーニに見られるファッション産業やチネチッタに見られる映画産業をつくりあげてきたのに、大阪の現状は非常に由々しきことです。メディアの華も咲かなかった。

松岡 小林一三は阪急をつくらなければいけません、ほかに挿し木してハイブリッドにするのではなく、小林文化だけが残ったという感じですね。アメリカ村と小林文化が合体するなんていうことにはならなかった。

池永 本来の上方モデルであれば、外国や日本の優秀な若者を集め、増城にして、新たなものを生み出したはずですが。

松岡 江戸の研究者たちと上方のことを話すと、惜しむことが三つあります。まず木村兼葎堂がアジア文化をメディアとして取り込んで、知の一大センターにしたのに、それを引き継ぐものが生まれなかったこと。次に『雨月物語』を書いた上田秋成のように自由に編集できる上方モデルが生まれたのに広がらなかったこと。さらに、近松門左衛門と井原西鶴という編集力と早さの両者を語れる人がいないこと。

池永 天下の台所をつくりあげたトランスファァー文化を失い、明治に入り大きな産業資本、分業モデルに呑み込まれ、ものづくりと商いの強みであったデザイン力が弱まってしまった。

松岡 商業文化を経済にできなかったのです。大阪は大きくなりすぎ、コストのかかる大企業・産業構造に巻き込まれ、大阪商人の本質や付加価値を生み出す力が消えてしまった。大阪府や市を小さくすることはできないので、モデル化やプロジェクティブ化を図り小さく分け、機能性の高いものに切り替えていけばいいはずですが。

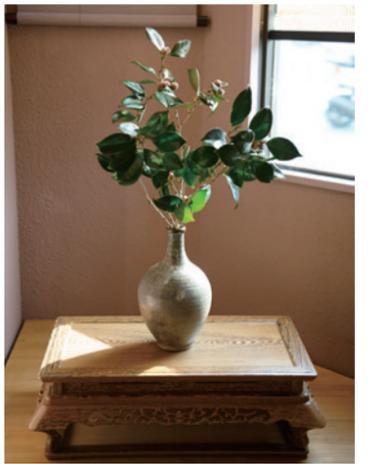
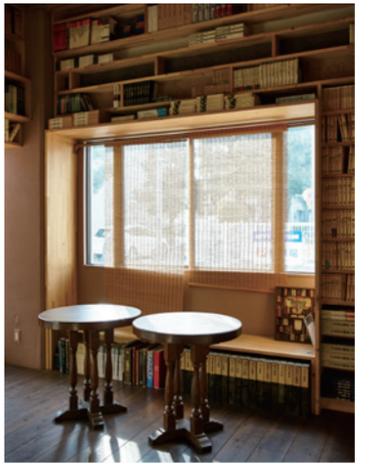
### 日本的な文化、精神性を引き継ぎ、アジアの拠点に

松岡 私は、大阪はもつと「煎茶」に賭ければ勝てたと思っています。抹茶ではなく、秋成も兼葎

池永 水上物流から鉄道物流への移行につづき、明治末の電話開通も関係する。電信技術の進展に伴う銀行決済システムの変化などで大阪に本店をおく必然性がなくなった。そのときに大阪としての情報の流通網の組み替えができなかった。

松岡 やはり、才能とかキャパシティといったソフト面、それから情報という目に見えないものに対して、「利」とは何か、型にするにはどうしたらいいのかと考えると、型にすることが甘かったのでしょうか。

池永 それでも阪急文化圏のようなものをつくりあげることができませんでした。なぜそういうものをもつてくれなかったのでしょうか？



本の茶室に見立てられた編集工学研究所の玄関口。床の間がしつらえられ、素木づくりの本棚には古今東西の全集が設置されている。

堂も好きだった煎茶文化ですね。抹茶文化がつくりあげたしつらえ、ふるまい、おもてなしに對して、一杯一銭のやり取りを広げてほしかった。池永 船場・商人文化のなかにはあったのではないのでしょうか。

松岡 あったんだけど、大阪独自の作法や仕切りにしなかった。何でも無料サービスにした。

池永 住文化でいえば、京都と外観は似ています。大阪らしい実利的、機能的な商人文化が障子や掛け軸にも表れています。大正・昭和初期の住宅には江戸以来の文化が残っていて、外国人の方が「スマート」と感じています。

松岡 茶室はどこにでもあります。大阪は茶室空間を増やすべきだった。もうひとつ大切なことは、ヒョウ柄のようなケバくてギトギトした文化と、「ええなあ」「上品やなあ」という船場の高踏美学とを両立させていくことです。

池永 1960年代に、心齋橋の百貨店が「おいでやす」という挨拶言葉を「いらっしやいませ」に変えたことが、ターニングポイントだったと言われています。この100年で大阪の言葉は大き

く変わった。

松岡 上方文化には江戸の分節力にはない「間」があるんです。

それから、女性文化も大切です。『夫婦善哉』のような女性がしつかりした作品もあれば、かつてマヒナスターズが歌っていたような男性すら女性的になってしまう文化がありました。

池永 女性文化が花開かないのは、女性の働き場が少ないということもあります。東京一極集中になってしまい、大阪で働きたいという女性はいらぬ、活躍する場が少ない、不適合が起きてしまっています。

松岡 儒教、仏教、道教といったものを捉え直す必要もあります。儒教はまさに懷徳堂以降の商人がもっていた心学で、道教はエビスさんみたいな仙人的なものです。こういうものをもう一度出して、大阪とアジアのトランスミッションを起こすべきです。かつてのアメリカ村のように、大阪のアジア化、アジアとのトランスネットワークを取り込み融合させた拠点を大阪は目指すべきです。観光客が来る街づくりではなく、アイコンとア

アイドルに満ちた儒・仏・道を加えた方がいい。アジア圏の多くはまだ新興国で、儒・仏・道をきちんと考えるまでには至っていませんが、そのうち精神や心を振り返りはじめるでしょうから、大阪が先取りできれば強みになります。

池永 恵比須さんは商人の神様や福の神として知られていますが、障害をもって生まれたエビス（ヒルコ）が西宮にたどりついたヒルコ伝説が起源にあり、外から来たものを受け入れ、弱者に対する温かい視線がこの地にはありました。

松岡 それが大阪の隠れたよいところ。四天王寺、蓮如、日想観、俊徳丸、説教節、観音めぐりなど、みんな弱者救済型です。

池永 近畿にそのイデオロギー、精神が脈々と流れています。

松岡 恵比須さんを「えべっさん」と呼ぶのは大阪だけです。正負がひっくり返り、負が正になっていく。ヒルコ的なものが恵比須的なものになるというのとはとても大事なことで、百太夫、淡島信仰とか全てもっている。それを出すべきです。

池永 そういう精神的な部分が、近畿圏のみなら

ずこれからの日本にとっても大切ですね。

松岡 決して大阪だけがダメなのではなく、日本全体がダメだから、大阪はチャンスと考えるべきです。

### 「場・交・耕」を切り口に 日本を捉え直す

松岡 私はかねてから、川を主体に文化をつくることができなかつたかと考えています。川は区画を越えていきますからね。たとえば淀川はどうでしょう？

池永 淀川は、モノの交易・人と情報の交流の場でした。天下の台所をつくりあげたのは水路ネットワークです。海と船上輸送にて外とつながり、

融合して価値創造される淀川として捉えるべきです。

「ルネッセ」は、「場・交・耕」をコンセプトにして(10頁)、3号を通して具体的な考察を進めていく予定です。今号の「場」では過去から現代、未来という時間軸のなかでの都市のあり方を問い、「交」では海・川・道などネットワークと「交わる」という視点からトランスファー文化を捉える。そして「耕」は、カルチャーの本来の意味の「耕す・栽培」としての文化です。

この「場」「交流」「文化」を見直し、かつて確実に存在した本質に新たな情報・技術を融合して、都市、そして日本をルネッセ(再起動)していきたいと思ひます。



研究所内には「守・破・離」の提灯が吊されている。基本の型を変幻自在に応用するための思考法だ。



松岡正剛

まつおか・せいこう

編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。1944年、京都府生まれ。71年(株)工作舎設立、総合雑誌『遊』を創刊。87年編集工学研究所を設立。以降、情報文化と日本文化を重ねる研究開発プロジェクトに従事。2000年インターネット上にイシス編集学校を開校し、ブックナビゲーション「千夜千冊」連載を開始。『知の編集工学』『知の編集術』『多読術』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』(全7巻)など著書多数。



池永寛明

いけなが・ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。

# ルネッセ 場

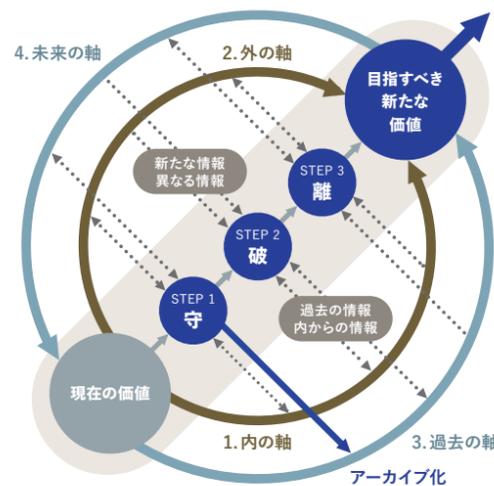
都市を問い直す

## ルネッセとは— Renesse (再び [ren] × 実在する [esse])

日本は新たな情報や技術を外より収集し受け入れ、過去と現在を融合させ、価値をアップデートしてきた。さらに「守」「破」「離」というプロセスを経て日本を成熟させてきた。しかしいつからか、かつてあった日本的なるものから新たなものにつくり替え、都市・地域を、価値観を変えてしまった。分断された過去と現在とを、内と外とをつなぎなおし、都市・地域が持っていた「本質」をルネッセ (再起動 [Renesse]) させ、新たな価値をつくりあげていきたい。



●「ルネッセ」の方法論 「内」×「外」と「過去」×「未来」という4つの軸を組み合わせ、「守」「破」「離」の3つのステップを踏んで、新たな価値を創造する。



- 守** 昔あった佳きもの、美しきもの、本質を発掘し、「型」「モデル」をつくり、見える化、アーカイブ化する。
- 破** 過去より引き継がれるものに、新たなもの、外から学んだものを組み合わせて、価値のアップデートを図り、新たな「型」をつくる。
- 離** アップデートされた価値に、内×外、過去×未来という4つの軸を融合することで、新たな価値を創造する。

都市・地域・コミュニティに埋め込まれた価値は、一様ではなく相互に関連した複合的・多様なものである。その複合的な本質に、「場」「交」「耕」の3つの視点から迫り、3号の有機的なつながりから、本質を再び実在させるべく「ルネッセ (再起動)」戦略の全体像を提示する。

<h3>場</h3> <p>116号</p> <p>都市を問い直す</p> <p>日本は過去にあった日本的なるものを捨て、新たなまちづくりを進めてきた。過去の再現でも再生でもなく、かつて存在した「本質」を掘り起こし、新たなものと融合し、新たな価値を創造し、都市・地域を再起動する方法を考える。</p>	<h3>交</h3> <p>117号</p> <p>交流を問い直す</p> <p>水路・陸路の結節点には物とともに人・情報が集まり、交流・変換がおこなわれた。内と外からの新たなもの・優れたものと、その場が持つ本質とを掛け合わせ、交えて流すという「トランスミッション」のあり方を考える。</p>	<h3>耕</h3> <p>118号</p> <p>文化を問い直す</p> <p>文化はラテン語の「耕作し栽培する」が語源。種から作物を収穫するプロセスの円滑化×各ステップの最適化にて文化が生まれる。地域を耕作し、地域をよりよいものにし、未来に引き継ぐ文化のつくり方を考える。</p>
--	--	--

# 震災が問う 社会と「場」

大山直美 構成  
奥山淳志 撮影

災害が多発する近年の日本では、被災地での復興をはじめ、まちづくりのあり方が根底から問われているが、まちの歴史や文化を継承した豊かな生活空間「場」の再生はいかに進められてきたか。大阪くらしの今昔館で館長を務め、上方の建築文化・生活文化を研究する谷直樹氏と、数寄屋建築の手法を用いて精力的に東北の復興に携わる三浦史朗氏に、今後、地域・社会を再起動するための「場」づくりに必要な視点についてお話をうかがった。

対談

「大阪くらしの今昔館館長」

谷直樹

Tani Naoki

三浦史朗

Miura Shiro

「構匠、株三角屋取締役」



京都に本拠を置く三浦さんが縁あって設計した㈱気仙沼観光タクシーの新社屋にて。谷さんは気仙沼に今後の大阪のまちづくりのタネを見つけに来たと言。

## 被災地で発見した自分の新しい役目

谷 今回の対談を行う場所として、三浦さんの手がけた建築がある候補地のなかから、ぜひ気仙沼に行きたいとお願いました。大阪を拠点とする私としては、阪神・淡路大震災のときにいろいろ思うところがあったからです。

当時、私が主査をしていた日本建築学会近畿支部の建築史部会では、昭和初期に建てられた数寄屋風の邸宅など、阪神間の歴史的建造物の被害状況を手分けして調査したんですが、構造の専門家が倒壊の危険があるというレッドカードやイエローカードを貼ると、貼られた所有者はもうアカンと思ってしまふ。僕たちがいくら、これは歴史的に意味がある大事な建物で、なくなってしまうたら二度とつけないと話しても、命に関わるのでこわいから建て替えるとおっしゃる方が大半で、無力さを感じました。芦屋の重厚な邸宅が軽いプレハブの住宅に置き換わって、はたして数十年たって落ち着いた街並みになるのか。まちというのは馴れ親しんだ街並みが徐々に変わっていくことによって深みが出ると思うので、途中で断絶してしまったのは非常に残念です。

それだけに、三浦さんがどんな思いで東北で新しい建物をつくっているのか、その建築家としての矜持をうかがうことが、これから自分が大阪でなすべきことのヒントやエネルギーになればと考えたわけです。

三浦 僕が最初に気仙沼に来たのは、震災から約半年後で、以前からお付き合いがあった糸井重里さんに「距離が離れたところにも現地が必要なものがないから、ひとまず現地に御用聞

きに行こう」と声をかけていただいたのがきっかけです。その直後に縁あって出会ったのが気仙沼観光タクシーの社長、宮井和夫さんでした。初対面で10分ぐらい話しただけで「家を建ててほしい」と頼まれました。僕のことでも三角屋も誰一人知らないまちに来たことで、自分の新しい役目が開けた気がします。この6年間に気仙沼で10件のプロジェクトに携わり、今も2件が進行中です。

谷 ご自宅はどちらに建てられたんですか？

三浦 もとの家は海のそばにあって津波で流されたので、新たに山の方の土地に建てました。土地の選定に約3年かかりました。宮井家が今後代々住むにはどんな場所がいいか、会社やまちとの距離を考えると選択肢は意外に少ない。自分は家をつくるプロの仕事をするうちに、知らず知らず土地を選ぶプロにもなっていたので、この土地であれば健康的な家が建つというのには感覚的にわかりました。通例では不動産屋の仕事ですが、実際にはそういう判断はしてくれない。被災地での家づくりの経験から、これは今後さらに求められる職能になりうるという発見がありました。

谷 そこまで含めて一緒に建物がつくれるというのは、大変だけど建築家冥利に尽きる仕事ですね。こちらの社屋の方は、鉄筋コンクリートの人工地盤の上に木造の建物群が建っていますが、この発想はどこから来たんでしょう？

三浦 これはもともと、気仙沼市と隣接する岩手県陸前高田市の集落をどう再建するかを考えていたときに構想したものです。そこでは12mの高さに土を盛って、その上にまちをつくろうという計画が持ち上がりましたが、それではものすごい量の土が要るし、空間としては何も生かされない。それより、現代の技術を使ってまず安定した骨格



右は気仙沼観光タクシーの社長、宮井和夫さん（写真左）の自邸。建築設計だけでなく、土地探しから庭づくりまで三浦さんが担当。「三浦さんを信じ、すべて任せることを突き通しました」と宮井さん。





新社屋の中庭から2階を見る。シンボルツリーはなんじゃもんじゃの木。

をつくり、なおかつ車と人を2層に分けることができなかつたかと思いましたが、結局実現には至らなかったため、ずっと温めていたんです。

**谷** なるほど、まちづくりのモデルを縮小して当てはめたんですか。タクシー会社は広い駐車場が必要だから、2層の構造はちょうど理にかなっていますね。

### 目に見える形で被害を建物に遺す

**三浦** 実は最初の年は三角屋の利益のうちから、ある金額を日本赤十字社を通して被災地に寄付したんです。でも、何にどう使われたかもわからず自分たちが稼いだ大事なお金が消えてしまったような感じがしました。それで、まず自分が動くこと、月3日は東北に行くことに決め、前年寄

ちですが、会社と個人の両方の社会貢献をバランスよく実践なさっているんですね。そういう会社経営のしかた、お金の生かし方があるのかと、非常に感心しました。

**三浦** ともかく何もなくなってしまったまちなので、お題もむずかしく速度も必要で、100年ぐらいかけてやることをギュッと5年ぐらいに凝縮して体験させてもらった感じです。

**谷** それほど充実感があるとなかなかやめられないでしょうね。建築は完成時だけでなく、その影響が何年にも及びますから。きっと三浦さんの仕事に触発された職人も出てくるし、ひよっとしたら建築家のなかにも、これを超える仕事をしなければと思う人も出てくるかもしれない。そういうまちの記憶につながる場の原点をつくられたんだと思います。

考えるべきであって、そこに建築家の天才的なセンスは要らない。それは内部で發揮すればいいので、外観はある意味、コピーしやすい状態をつくる。町として、景色として、いかに全体感をもった意識でつくられるかがこれからのプロの生き方ではないかと思うんです。

**谷** 確かにその土地を持つ共通の建築デザインを生かして、まちをつくるというのはとても大事なことです。この周辺のまちの復興を見ても、隣同士、まったく縁のないデザインで、どこの都市にもあるような建物が並んでいるのは残念ですね。今、三浦さんがおっしゃったような意識は最近の

付したお金と同額を、自分が関わる建物の工事費の一部に充てることにしたんです。例えば、陸前高田の八木澤商店の新社屋では、外壁の側面を全面「なまこ壁」にしましたが、あの壁の施工は三角屋です。歴史ある八木澤商店の佇まいを少しでも再現することが、将来にわたりまちにとって意味を持つと思ったので。

**谷** 普通は会社として貢献するか、個人としてボランティア活動に参加するというふうに分かれると思いますが、会社と個人の両方の社会貢献をバランスよく実践なさっているんですね。そういう会社経営のしかた、お金の生かし方があるのかと、非常に感心しました。

### まちづくりに建築家の個性は要らない

**谷** その土地の歴史や文化をどう残していくかは、地域によっても違ってくると思います。例えば、同じ関西でも大阪と京都ではだいぶ違う。梅棹忠夫先生がおっしゃっていましたが、「京都は外から来た人が自分たちのルールに従わないと排除するが、ルールに倣えばとても住みやすいまちなんや。ところが、大阪人はサービス精神旺盛で、外から来た人に合わせてしまうので、大阪の文化の真髄がだんだん薄れてしまう」と。

私が館長を務める「大阪くらしの今昔館」を最初にどう運営しようかと考えたときにも、大阪らしさを伝える博物館で展示する価値があるのは、大阪の「人」ではないかと思いました。そこで、

建築家のなかでは広がりつつあるんでしょうか。

**三浦** 広がらないですね、僕もはつきり言って変人ですから(笑)。大学院まで出て、大工のもとへ修業に入ったのは200人中数人でしたし。

**谷** 私も大学の建築学科で、建築史を専攻したのは90人中1人でした。当時は高度経済成長の後期で、学生の大半は建築設計や都市計画を選びましたから、私が歴史をやりたいと言ったら、先生に「君はちょっと体が悪いんか」と言われたほどです(笑)。お話を聞いてると、三浦さんはすごく職人魂を持っていらっしゃいますね。ものづくりのまち・京都で生まれ育ったから、そういうDNA

今、ボランティアの「町家衆」と呼んでいる人たち、あの空間の中で自由にお客さんをもてなしてほしいとお願ひしたんです。開館当時からいらつしやる86歳のボランティアが着物を着て薬屋の主人になりきって、「昔のへっつい(かまど)の火はこうやって焚いたんや」と話すと、お客さんにすぐく伝わるんですね。

**三浦** 気仙沼の人たちも本当に温かく迎えてくれる人たちで、もう「ウェルカムの塊」みたいなんです(笑)。何もなくなつたはずなのに、いつもこちらが満腹で帰るといふ、このギャップに毎回感動して帰っていく。

**谷** 昨日今日と三浦さんが手がけた建築を見て回りましたが、建主の皆さんはあれだけの被害に遭つたら、将来への展望を失った時期もあつたと思うのに、自分たちでやっていかなければという気持ちがとても強い。それは空間やデザインが持つ力も大きくて、形があるというのはすごいことだと思えます。三浦さんのようにいい仕事をすれば、ちゃんと次の展望が拓けるんだなあ。今さらながら建築の力を再確認する思いがしました。

**三浦** 特にまちづくりを考える際、建築家が持ちがちな「作品をつくる」という意識は邪魔です。きれいごとではなく、この社屋も自邸も宮井さんの作品であつて、僕はそれを長く持たせるために雇われたにすぎない。そういう立ち位置を誤ると、その場所らしさや住む人らしさは全然とどまらないんです。

そもそも今の建築家の多くは、新たにデザインすること、過去や周辺から参照して持つてくるべきことの線引きをまちがっているんじゃないかと僕は思っています。新たにまちの骨格をつくるには、何か共通のデザインをベースにした建物を



上/広いデッキのある2階。鉄筋コンクリートの人工地盤の上に、木造の建物が建ち、緑が茂る。  
下/道路側外観。建物の構成が一目瞭然。カラフルな車体は地元の子どもの絵をあしらったもの。



ともに大学で建築を学びつつ、工務店に修業に入った三浦さんと、建築史を専攻した谷さんは、お互い異端児だったと意気投合。京都人である三浦さんから、大阪には日本が進むべき未来のタネがあるとエールを送られ、大阪人の谷さんは満面の笑みを浮かべた。

を受け継いでいるのかなと思います。  
三浦 僕が中村外二工務店で日本建築や数寄屋を学ぼうと思ったきっかけは、大学院のときに久住章さんというすぐれた左官と出会ったことです。もちろん、中村外二さんも天才的な職人でした。よく建築家は指揮者だといわれますが、そうではなく大工や左官と同じように、職能としての設計をやるプロになって、優秀な職人たちのメンバーに入りたいというのが目標でしたから、そう言っていただけるとしてもうれいしいですね。

### 学んで砕いて 自分なりの数寄屋をつくる

谷 三浦さんは数寄屋をどんなふうに捉えていますか。  
三浦 僕は今、数寄屋というのが和のステレオタイプになってるのが気に入らない。数寄屋は本来「数寄者」から来た言葉で、住まい手や使い手の個性を最大限引き出すための方法だと思っています。つまり、数寄屋には多様な方法があるべきで、今後は数寄屋という手法を使って、将来その場所のスタイルになるようなものをつくりたいと思っています。

かくいう僕も昔、苦い経験をしたことがあります。依頼を受けて、ある地方の重厚な佇まいの街並みの一角に数寄屋の店をつくったんですが、繊細な数寄屋建築は京都という場所には合うけれど、そのまま他に持っていく瞬間に下品に見える。同じ失敗は二度と繰り返すまいと思いました。それ以来、その場に合ったものをつくるということ、より心がけて取り組むようになりましたね。とはいえ、洗練された質の高い数寄屋建築を一通り学んだことは非常に大きいとは思っています。

床の間や畳すら知らない人もいる。今昔館の座敷に連れて行くと、みんな突っ立ったままで「天井が低いなあ」と言うんです。そこで畳に座らせて、座った高さに合わせて天井や床の間の掛け軸の高さが決まっているんだと説明すると、やっとなわか。今昔館はできるだけ空間を体感すること、日本の伝統的な住まいのよさを知ってもらいたいと工夫を凝らしています。

三浦 僕自身も京都人なので、正直、大阪はごみごみして苦手なところがありますが(笑)、考えてみれば茶道は堺で生まれたものだし、何かが生まみ出される力のある土壌が大阪にはあると思います。そこから派生して非常に洗練されたものが京都にとどまっているので、京都の役目は今後も続くでしょうが、もう一度、大阪の豊かな土壌や賑わいのなから生まれてくるものが育っていかないと、日本の未来はないと思います。

谷 力強いエールをありがとうございます(笑)。大阪は柔軟すぎて伝統を絶やしかねない土地柄ではありますが、逆を言えばいろんな実験がしやすい場でもあるので、私は今後、今昔館を通じて行った多様な実験を理論化、普遍化することによって、まちづくりの役に立てるよう、博物館の世界でやれることをモデル化したいと考えています。  
例えば、高齢者が今昔館に来ることは、認知症のリハビリになる。回想法といって、昔のことを思い出すと頭が活性化するんですよ。このように、博物館は実利的にも意味があるし、伝統的な空間が持つ力をもっと一般の人にもわかってほしいですね。

実際、人は年を取るほど、引越したただけで呆けたりします。記憶の中の風景が連続していることは、それほど大事なことです。震災復興でも、劇

谷 数寄屋とは桂離宮とか茶室のことだと日本人は考えがちですが、利休が出て200年の間に形式化してしまったところに悲劇があるのかもしれない。建築家のなかにはちゃんと数寄屋を学ばずして「おれは数寄屋をつくった」と言っている人が少なくないですが、三浦さんは中村外二さんのところで厳しく数寄屋を学び、それを1回砕いていながら、自分なりの数寄屋をつくっていて、それこそが本当の意味での数寄屋だという気がします。誰もが知っている形でないと数寄屋じゃないと批判する人もいますが、そんなこと言っていたら文化財としてしか残らないし、現代や未来に継承していくのはむずかしい。

三浦 数寄屋はもともと新し物好きの人が、いかに伝統的なものに新しいものを採り入れようかと考えて出されたスタイルです。今、アジアの人たちがなぜ数寄屋に憧れるかというと、過去と現代が断絶せずにつながっている点に可能性を感じるからでしょう。だから、僕は数寄屋を単にクラシックだとは思っていません。僕が中村外二さんのもとで学んだのは亡くなるまでのわずか3年半でしたが、幸い三角屋にはそこに30年いた職人も含め、数寄屋のベースを知るメンバーが大勢いますから、その環境は強みですね。

今、三角屋では施主に合わせて材料を選んだり、建築だけでなく庭の骨格まで設計者が考えたりと、ひとまず全部受けるところから始めています。建物と共に庭をつくるため、三角屋がストックする材料の半分は石材です。

谷 きわめて東洋的なつくり方ですね。

三浦 そうなんです。今は建築と工芸、空間としつらえにも境界線がありますが、本来は一体で、場合によったらそこに座る人の着物まで一体感が的に空間が変わってしまうでしょう。いくら鉄筋コンクリートの近代的な建物で防災面は大丈夫でも、東京の設計者が机上で設計したものを一方的に提案するだけではダメだと思。やはり、三浦さんのように現地の調査をしっかり行っただうえで、地元の人たちの力を借り、その人々を励ましていくことが大切です。そういう仕事を、私もやっていきたいと思っています。

あってもいい。どこに境界線を引くかは、時代に合わせて引き直していかないといけないんじゃないでしょうか。

谷 建築は本来、風景からインテリアまで含めた総合芸術なのに、それを切り分けてきたのが近代かもしれません。かつて大学の工学系の建築学科では、鉄筋コンクリートと鉄骨しか教えず、木造は劣ったもののように扱われてきましたが、今ようやく見直されています。三浦さんは確かに異端で、自覚はなかったのかもしれないけど、いちばん最先端を読んでいる感じがします。それがきっかけで未来のタネになっていくのではうね。

### 外からの視点に 日本が目指す方向がある

三浦 未来のタネということ言うと、今、日本建築や数寄屋が好きなのはアジアの人たちが増えていて、今昔館も外国人客がとても多いそうです。あの人たちが憧れるものに、僕たち日本人が目指すべき方向や方法がたくさんある気がします。

谷 今昔館はインバウンド需要が非常に増えて、今や年間57万人の来場者のうち、半数以上が外国人です。彼らの感想を聞くと僕自身も学ぶことがあるし、あの場で日本や大阪の良質な文化をちゃんと伝えていくことで、お客様に何かを感じてもらい、それがまたタネとして広がっていくのではないかと期待しています。

三浦 いま「体感」として歴史を感じる場所がほとんどないから、そういう意味では今昔館は建築学科の学生も見に行つて学ぶべきだなと思います。谷 体感というのは大事なことです。今、茶室を体感しようと思つても、なかなか気軽に入れるところがないし、大学生でもマンション育ちだと



谷直樹  
たに・なおき

大阪くらしの今昔館(大阪市立住まいのミュージアム)館長。1948年生まれ。大阪府立大学名誉教授。京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。専門は、建築史・居住文化史・博物館学。今昔館の先駆的な企画・運営で日本建築学会賞および同教育賞などを受賞。著書に『町に住まう知恵——上方三都のライフスタイル』などがある。



三浦史朗  
みうら・しろう

構匠、(株)三角屋取締役。1969年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科・大学院卒業後、中村外二工務店設計部に入店。退店後は(株)とふうを設立。2005年、「三角屋」に改名し取締役を務める傍ら12年には(株)六角屋を設立、代表取締役を兼任する。東京系井重里事務所の内装や「気仙沼のほほ日」など、多数の設計施工を手がけている。

# 江戸に学ぶ サステナブルな都市のあり方

脇坂敦史 構成  
栗林成城 撮影

経済活動の中心を担い発展を遂げた近代都市。ところが、その行き過ぎた消費経済が、気候変動や生態系の変容などの深刻な問題を引き起こしている。今、その消費活動の背景にある人間の行動様式そのものを根本的に見直す必要があるのではないだろうか。現代社会に転用可能な江戸時代の循環型生活スタイルを提唱するアズビー・ブラウン氏と、経済発展により格差が進んだ江戸社会における思想を研究する板東洋介氏に、サステナブルな都市を実現させるためのヒントを、多角的な視点で語っていただいた。

江戸時代のシンボルである江戸城の跡地周辺は、千鳥ヶ淵公園などに整備され、現在でも、水と緑のある豊かな自然と都市との共生を見ることができる。

対談

「金沢工業大学シニアアドバイザー」

アズビー・ブラウン

Azby Brown

板東洋介

Bando Yosuke

「皇學館大学准教授」

## 江戸時代の循環型生活の基層について

板東 アズビー・ブラウンさんが「サステナブルな生活」という視点で江戸時代の生活を解説された『江戸に学ぶエコ生活術』という本を読ませていただき、大変感動いたしました。

たとえば古い民家の形というのは、日本人の考えと生活の反映です。私自身は江戸時代の思想を専門に研究しておりますが、書かれた資料のなかには、それがなかなか現れてこない。当時は中国で書かれた儒教、とりわけ朱子学や陽明学の文献を解釈するという営みが思想の中心でしたが、果たしてそれは多くの日本人が働いて生きて死んでいく、その生活過程と本当に絡み合ったものであったのか？そこにはかなり疑問があります。

江戸時代の国学者も、そのような考えから儒学を批判し、『古事記』や『万葉集』といった日本の古典に向かいました。明治以降の日本でも、輸入した西洋の思想が大衆の生活とつながることはなかった。この本に描かれた生活の細部にわたる美しいイラストを見ている方が、荻生徂徠の『論語徴』を読むよりも、ダイレクトに日本人の考え方が伝わってくるのではないかと思ったのです。ブラウン 大変光栄です。今の日本人は儒教、特に朱子学については何も知りません。でも、私が初めて日本に来たとき強い印象を受けたのは、日本人の生活と価値観に深く染みついた、たとえば先輩と後輩というような考え方です。西洋でいえば、多くの一般常識や諺が『聖書』に基づいているのと似ています。ですから私は、江戸時代にあったような循環型の生活の基層にも、儒教や神道、そして仏教的な価値観があったと感じている

のです。

板東 そうですね。ただ日本の場合、はじめに思想があつてそれを典拠として道徳ができていくといえるのか、微妙なところがあります。農民が共同で農作業するとか、武士が合戦をするといったプラクティスが先にあり、それを表現するとき禅や儒教の言葉を借りてみた、といったことも多かったのではないかと。

ブラウン 確かにそれは、どちらが先か分からない（笑）。

板東 とりわけ江戸時代に経験に基づくプラクティスと思想がずれていると感じる理由は、武家政権の性質そのものにもあると思います。同時期の中国や李氏朝鮮では政策決定の基準が儒教にあった。一方、江戸幕府の正当性はつまるどころ徳川家康が戦で勝ったことによるのであつて、きわめて現場主義的かつ現実主義的な政権運営ができたのだと思います。

ブラウン 江戸時代初期に建築用の材木が不足し、多くの山が丸裸になったことがありましたよね。深刻な土壌浸食や洪水も起きた。そこで「留山」という、伐採や立ち入りを禁じるような素晴らしい仕組みができた。もちろん、刃物をもって山に入るだけで死刑といった極端な部分もあります。しかし、その成立や運用を見ていると、幕府が厳しい法律で全国を無理やり従わせるといふ形ではなく、もう少しやわらかく基本的な考えをまとめ、それぞれの地域に合った問題の解決をうながすような独特のやり方があつたように思うのです。

板東 明治以降と違い、中間団体の自律性を最大限に認める形で、トラブルが起きたときは内部で解決させ、その報告を上にするという形をとっていたということですね。江戸初期の陽明学者で

ある熊沢蕃山という人も、岡山藩で新田の開発よりも後背地としての山や川の重要性を説き、植林することが急務だと主張した人でしたが、そこでも同じようなシステムが働いていたと思います。

## 江戸時代における自然観と労働観

ブラウン 江戸の思想家たちが自然について、どのような考えをもっていたのか興味があります。

私の本はもともと英語で書いたものですが、ヨーロッパ言語の文脈では「自然を守る」という表現に違和感はないんです。けれども日本語では、どうでしょうか。たとえば江戸時代に「自然を守る」という概念はあつたのでしょうか？

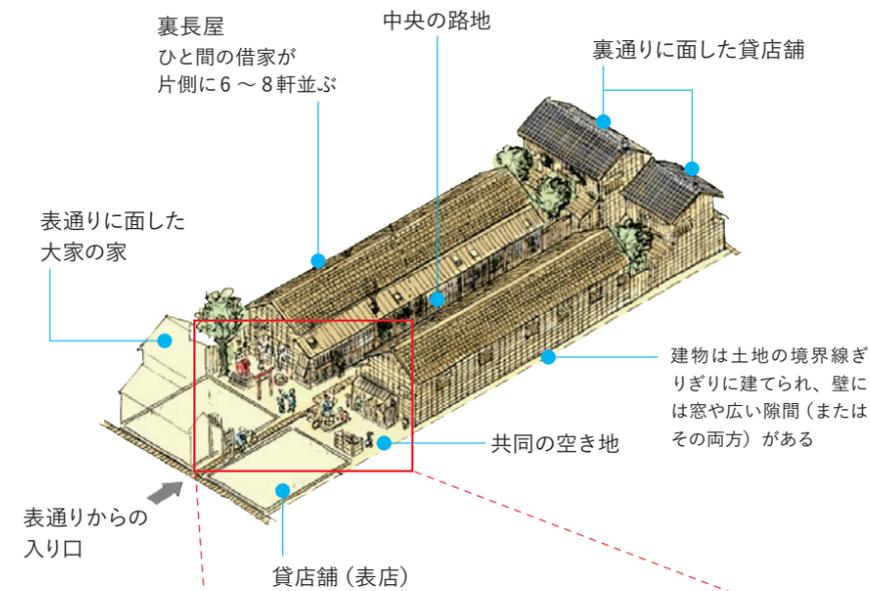
板東 自然に近い言葉といえば、天地、森羅万象あるいは山川草木でしょうか。ただ、保護しなければならぬほど、人間と自然が対立しているという発想はなかったと思います。だからこそ、かつて過剰伐採につながることもあつたかもしれないですが、自然のなかに包まれて人為があるのが当たり前で、人間が自然を破壊できるなどとは思わなかったのではないのでしょうか。

一方で、自然に従っているのが人間の正しいあり方なのであるという強制力は強かったと思います。それは、自然を統制したり使役したりするよりも、四季のリズムに従い、環境に調和した生活を送るよううながすものです。いわば、鳥がなき、川が流れるように人もあらなければならぬのであると考えた。

ブラウン 「自然を守る」という概念がなくても、ひじょうにうまく自然を守ることができたわけですね。ときどき、江戸の人が産業革命につながるような機械をつくらなかったのは、もしかしたら

## ●江戸時代の町屋敷

ブラウン氏著書『江戸に学ぶエコ生活術』では、当時の町に暮らす人々の様子もイラスト入り(書内ではモノクロで掲載)で詳細に伝えられている。農村とは異なる限られた空間のなかで、住環境だけでなく人々のコミュニケーションの場までさまざまなサステナブルな工夫がなされている。



### 江戸の町の構成と町屋敷の仕組み



町人地区は「町割」と呼ばれる区画方式に基づき設計されている。1区画をひとりの地主が所有し、共同設備や広場などの管理も行う。



**稲荷**  
稲荷が設けられていることも多い

**入口の木戸**  
防犯用の鋭く削った竹(忍び返し)がつけられている

**どぶ(排水溝)**  
木の板や角材で覆われていて簡単に取り外せるようになっている。町ごとに専門の請け負いがどぶさらいを行う

**井戸**  
共同の洗い場は水の節約とともに、情報交換の場にもなっている

**共同便所**  
排泄物は仲介業者により買い取られ、下肥専用の運搬システムで運ばれた後、田畑の肥料に使われる

**ゴミ捨て場**  
リサイクル品も置かれ、住民は自由に利用できる

儒教の価値観でそれが怠け者のすることを意味したからではないか、とも思うんです。

**板東** 仕方なくやるような義務ではなく、労働も「誠」であってナチュラルな営みなのであるという考え方は強かった。マルクスのユートピアは「労働のない世界」かもしれませんが、それはアジア人の夢ではありませんね(笑)。

ブラウン でも江戸時代には、意外と暇な人が多かったみたいですね。武士なども仕事は週に半分くらい。あとは庭いじりしたり、趣味に没頭したり。あるとき加賀藩で食料が不足して、武士も自分の魚を釣らないとだめだということになったらしいんです。もちろん武士だから、商売ではなく趣味でやる。羽毛や金箔、漆まで使った豪華な工芸品のような加賀毛針がそこから生まれた。

**板東** 今もそうですが、日本人には、生活を苦しくしている構造的な問題を考えてそれを改善するという方はいかず、生活や趣味のなかにちよっとした慰めを見いだすという習性があるのかもしれないね。

### 美意識の背景にあるもの

ブラウン こういう日本人の生活と深く結びついた美意識の背後には、何があるとお考えですか？

**板東** 私は禅の影響が強いのかと思います。仏教の修行というのは身体でやるものですから、どうしても修行は生活になる。掃除する、ご飯をつくる、瞑想する。特に道元禪師以降、日本の禅宗は修行それ自体が悟りなのであるという考えが強くなってきました。

室町時代以降、武家を中心に禅の思想が広まりましたが、その端的な表れが茶道でしょう。当

り前の日常生活それ自体が目的・価値なのであって、生活は何かの手段ではないという美意識。だから、たとえば畳の縁を踏まないとか、敷居はまたぐとか、きちっと生活すること自体が「生の目的」になりうる。

禅の修行は常任坐臥すべてが修行ですが、特に大事なのは料理です。今の家庭料理はどう手を抜くかがポイントですが、すべてに手を抜かない。火の通りにくい野菜は最初に煮ておき、タイミンをずらして炊き合わせる。だから、ちつとも省エネじゃないですね(笑)。でも、いわゆる「丁寧な暮らし」というのもそのロジックです。美しい生活それ自体が人生の目的であるというのは、おそらく日本人はいまだに根強くもっているんじゃないかと思っています。

ブラウン 仕事のすべてが一種の修行だという感覚は、たとえば宮大工のような職人たちの気質から感じる可能性があります。ここまでやるのか、と驚くほど細部にまで注意を払い、それが使う人やモノそれ自体への尊敬にもつながっている。アメリカのシェーカー教徒がつくった家具などにも言えることですが、背景に似た考えのあるところでは、無駄をそぎ落とした、ミニマリストックで美しいデザインが生まれるのかもしれないね。

### 長屋的なものと現代

ブラウン 今の日本でも少し想像力を働かせると江戸時代の面影を感じることは、少なくありません。東京の小さな路地などに入ると、住人が緑を大切に育て、ちょっとした隙間にも植物を育てているのを見ることが出来ます。あるいは、狭い長屋の生活スタイルも、なんとなく想像できる。私

が住んでいる横浜でも、ごく最近まで近所はみない顔見知りです。挨拶を交わし、朝になるとゴミ捨て場で「井戸端会議」が行われていました。今はプライバシーが重視されますが、全体としてはそれでコミュニティが損を失っている。これから大きな挑戦になると思うのは、どうやってプライバシーを守りながらも交流できるような場をつくるか。ある意味、それは都市計画の問題です。

**板東** ひとつは儒教の影響もあると思うんですが、江戸幕府は擬制の親子関係を奨励していたんですね。長屋の大家と店子は親子同然。また、店子同士は兄弟だから相互扶助せよ、という話です。

さらに長屋にはもうひとつの形成要因があって、それは単純に支え合わないと生きていけない、という身も蓋もない理由です。今は東京でもシェアハウスが増えています。今も東京でもシェアハウスが増えているように感じます。長屋の大きな機能として、たとえば育児の外注というか分担があります。今よその子を預かっているし、うちもそのうちお願いするから、という形で身を寄せ合って生きていく。これは日本でもあと10年、20年後に主流化する可能性がある。

ブラウン シェアハウスには私も注目しています。自分の部屋というプライバシーもあり、台所やダイニングのような共同空間もある。今のシェアハウスは20代、30代の若い個人が中心ですが、やがて子育てを助け合うような家族単位の「ネオ長屋」のようなものも、できるかもしれない。

**板東** 確かに、空間デザインの問題は大きいですね。

ブラウン ご存じのように、かつて屋敷に門を構えられたのは武士だけでした。明治時代になると、それに憧れてみんなが門をつくった。ただ江戸時

代の生活を調べていて思うのは、長屋暮らしでもお互いの関係のあり方で、プライバシーを守ることとはできる。無視する、見ないふりをするとかね。今でも、電車に乗るときにはみんなやってる。お裾分けのような文化も、貨幣経済やお米の経済とならぶ、ひとつの経済システムでしょう。今も田舎の方にいけば、そういう「循環型経済」が、ちゃんと続いている。

**板東** 落語などでよく長屋の「味噌、醤油は借りてくるもの」みたいな感覚が描かれますね。私も昨年から三重で暮らしているのですが、(近所の方から)旬の野菜や魚をたくさんいただくので、あまりスーパーマーケットに行く必要がなくていいです。私は学者ですから何もあげるものがなく、白菜のお返しに論文の抜き刷りをお渡しするくらいですが(笑)。

**ブラウン** 知識のお裾分けですね(笑)。

### 学ぶこととそれ自体が楽しい

**ブラウン** 江戸時代の身分制度はもちろん厳しいものでしたが、武士も歌舞伎を見にいたり、町人も武士と一緒に詩を書いたり勉強したり、結構羨ましいと思うことも多いですね。何よりも、江戸時代の識字率の高さには目をみはるものがあります。

**板東** 近世日本の学習熱というのは大変なものだったわけですが、今の研究者がよく分からないのは、なぜみんなそれほど学問が好きだったのかということ。他の儒教国は勉強したら科挙に合格して役人になれますから、明確な動機がある。でも日本には科挙がないし、職業は世襲です。にもかかわらず余暇で学んだ。なぜそれほど熱心に学

びました。立身出世とか、学歴、偏差値という形で学ぶことに実用的な目的ができる、どうしても面白くなってしまふ。

**ブラウン** 知識のための勉強、自分を磨くための勉強というのは素晴らしいですね。私も日本の大学で教えているけれど、学生たちはかなり合理的に考えている。「大学に来る理由は、仕事を見つけてやることではない」と話すのですが、残念ながら就職率の向上を目指している大学側の考えは違ふところにあるようです。勉強のための勉強というのは今、贅沢なのかなあ？

### 長期的な視点をもつ

**ブラウン** 江戸時代の人は考えている時間のスパンが長かったなあ、と強く感じます。林業で木を育てることもそうだし、大工がつくるものも数百年単位で見ている。今はそういうスパンでものを考えることができない。その暇がないし、短期的な利益を考えて行動しなければならぬ。とても残念なことです。

**板東** 近世における社会デザインの基本は、いわば選択可能性を減らすこと。生まれたところで生きて死ぬしかない。「いやだったら出て行く」わけにいかないから、逆にいうと、生まれ落ちた共同体に対してちょっとくらい自分が貢献しすぎてその見返りがなかったとしても、世代を重ねればいつかは戻ってくるんだと考えられる。たぶんそれが相互扶助の基本にあつたと思います。一種のゲーム理論といえなくもありません。一回の人生なら相手を騙して得をした方がいいかもしれない。でも何世代も世代が交代し繰り返しますので、結局のところ一番よい戦略は利他的であることになる。



「江戸は諸国の掃き溜め」と称したのは荻生徂徠。現代の東京をはじめとした都市のあり方を見直すためにも、ブラウン氏や板東氏など分野を超えた識者が交わる「場」をつくることも重要だ。

んだのか？ 思想史学者である前田勉先生の『江戸の読書会』という著書があるのですが、その結論は「楽しかったから」というんです(笑)。  
**ブラウン** 武士がより重要な役割につくための試験などがあつたことはないのでしょうか？

**板東** 江戸時代を通し、家柄主義と能力主義の対立はありました。19世紀に入る頃から各地で藩校がつくられ、藩校の成績が藩の役職につながるというルートもでてきました。けれども、最後まで

**ブラウン** 「結」のような共同作業であるとか、お金の貸し借りを含んだ組合のような仕組みも、それがあつたから成り立っていたんでしょね。長く続けば続くほど、システムは安定するし、誰もが信用するでしょう。

**板東** 「いやだったら抜けられる」という人間関係に変容したら、この社会はもたないと思生徂徠や太宰春台は考えました。だから、民を地に落ち着けてよそに行けないようにしなければいけない。都市と地方の格差が広がる現代にも通じる問題意識だと思いますが、これを今そのまま主張することは難しいでしょうね。

**ブラウン** 今は選択肢が多すぎて、それが問題になってる。なんでも自由ですが、そのなかで自分に一番合っているものを見つけてるのは大変なこと。だからこそ何かを目的としない、それ自体のための勉強や旅、モノづくりといったものが大切になってくる。何を大切にしたいか、を真剣に考えたら、ある意味でみんな同じ結論になるんじゃないでしょうか。自分、そして家族を大事にする、国を大事にする。そして、環境を大事にする。

それにしても、今回いろいろ教えていただいた江戸時代の文献は、まだ200年くらいしかたっていないのに、くずし字や漢文で書いてあるため、ほとんどの日本人は読むことができません。一部の専門家だけしか読めない特殊なものになってしまっているのが残念でなりません。400年以上も前に書かれたシェイクスピアの作品でさえ、英語圏の人間は努力すればなんとか読むことができるのに……。

**板東** よく日本文学研究の方も、くずし字と漢文のリテラシーがないからシェイクスピアと同時代の文献が日本ではまったく読めないとい嘆いておら

能力主義が一般化することはなかったと思います。

学問の場には、身分の差というものがない。『江戸の読書会』でいう会読というのは今でいうゼミナールですが、そこには読書量と年功(何年そこにいるか)の序列しかありませんから、たとえば下級武士の息子が家老の息子に対してお前の経典解釈はおかしいと言っても構わない。だから楽しい、というのもあつたのでしょね。ところが明治以降は、学が「役に立つもの」になってし

れます。

**ブラウン** 文学、建築、思想……あらゆる分野で同じことが言えると思うのですが、これからの日本は、西洋と日本の両方を知らなくては十分ではないと感じます。もちろん、ひとつのことを専門的に学ぶだけでも大変ですから、勉強する時間がないかもしれない。でもプラスアルファとして知ることが大切ですし、その意味は重いでしょう。今日のお話を伺いながら、それをより強く感じました。



アズビー・ブラウン

あずびー・ぶらうん  
金沢工業大学産学連携室シニアアドバイザー。1956年生まれ。イェール大学で日本建築を研究後来日し、東京大学大学院工学部建築学科修士課程を修了。金沢工業大学未来デザイン研究所所長を経て、現在は同大学シニアアドバイザーとして活動するほか、MITなど内外の機関にて幅広く活躍。著書『The Genius of Japanese Carpentry』『江戸の学ぶエロ生活術』など。



板東洋介

ばんどう・ようすけ  
皇學館大学文学部神道学科准教授。1984年生まれ。東京大学文学部思想文化学科基礎文化研究専攻倫理学専門分野修士課程を修了。日本学術振興会特別研究員PDを経て現職。専攻は日本倫理思想史。2010年日本倫理学会和辻賞受賞。共著に『自然と人為——「自然」観の変容(岩波講座日本思想第四巻)』など。

# 五感でまちを捉え直す

脇坂敦史 構成  
宮村政徳 撮影

巨大資本の流入や不動産開発により都市空間の均一化が進むなか、まちの記憶を引き継ぎ、豊かな奥ゆきのある「場」をつくるにはどうすればよいだろうか。「五感で感じる身体性」をキーワードに住生活の調査研究に携わる島原万丈氏と、都市地理学の視点から盛り場のフィールドワークを行う加藤政洋氏に、数値では測れない「場」の魅力について語っていただいた。



オフィスビルが建ち並ぶ大阪・道修町(どしょうまち)にある「少彦名(すくなひこな)神社」。18世紀後半から葉の神様を祀り、周囲には今も製薬会社が連なる。

対談

【FULL HOME'S 総研所長】

島原万丈 Shimahara Manjiyo

加藤政洋 Kato Masahiro

【立命館大学教授】

## 都市の魅力と五感で感じるエロス

**加藤** 島原さんが中心となってまとめられた「Sensuous City [官能都市]——身体で経験する都市・センシユアス・シテイ・ランキング」という調査研究は、「官能」という言葉をキーワードに魅力的な都市のあり方について考察した画期的な試みですね。思い出したのは、フランコ・ベラルディ(ビフォ)というイタリアの思想家が、現代都市とは本来、エロスの空間であると述べたことです。彼のラディカルな思想のなかでは、本来は五感で直接的に感じるべきものである都市が、今は快適な車で好きな音楽を聴きながら窓ガラスを隔てて見るだけの、いわば「ポルノグラフィ」になっているというのです。

**島原** それをおっしゃっていただき嬉しいです。実は私たちもエロス(エロス)という言葉を使おうとしていたのです。効率優先でつくられる最新型の高層ビルやショッピングモールにもよいところはありますが、何かが足りないと感じる。それは、ロゴスに対するエロスのようなものであろうというの出発点でした。幸いにも多方面で好評を博してはいますが、「官能」などという言葉はけしからん、と怒られることはよくありますよ(笑)。とはいえ、私は長くマーケティングの仕事をしてきたもので、都市の専門家ではありません。加藤先生のご著書『花街——異空間の都市史』も読み、勉強させていただきました。

**加藤** 私が盛り場のなものにひかれていろいろな都市を巡り歩くなかで、とりわけ面白いなあと思うのは、都市が都市としてできあがってくる瞬間に、特定の機能みたいなものが集積することです。

明治以降の日本ではとりわけ顕著な傾向ですが、それは決まって生鮮食品などを売る市場的必要素、歓楽街のような「花街的」な要素、さらには劇場や映画館といった娯楽的な要素の3つです。こういう娯楽的な消費の局面というのは、都市のインフラや住宅がままたまならないような状況でも、人が集う核のような場として必ず生まれている。**島原** それを「インキュベーター」という言葉で表現されているのが印象的でした。娯楽的な消費というのは、都市計画やまちづくりの専門家にとっただけでなく、一般に都市がもつさまざまな機能の最後につくオマケみたいなものと考えられていると思います。しかし歴史的な流れを見ると、むしろそれが先行してまちをつくっていくのですね。

## リノベーションがもつ新たな可能性

**加藤** 島原さんは、駅前の景観が画一的でどこも区別がつかないと指摘されています。私も自分なりになぜだろう?と考えてみました。たとえば大阪駅は大阪市の外側である旧曾根崎村につくられました。田んぼのど真ん中ですよ。そういう、いわば「場の履歴」の書き込みが少ないところだからこそ、あまり土地に縛られない魅力があって、戦後の知識人たちなどはかえって期待をもっていたのでしょう。

**島原** 地方都市でも、古い中心市街と離れたところに駅があるという例は多いですね。一方で東京では、東急が大正時代に沿線で主導したまちづくりが象徴的ですが、比較的ウォークアブルなまちが駅を中心に広がっている。しかし、どちらのタイプの駅前でも今は大規模な投資が入って高層オ

フィスや高層マンションをつくるという再開発が行われています。事業化し、予算をつけ、補助金をつけた時点でフォーマットが決まってしまうのです。**加藤** だとすれば逆に、大規模な再開発のない旧来の市街地にはまだこの先、歴史性を踏まえた可能性みたいなものがあるのではないのでしょうか? かつてその都市が生まれた核であったような場所へ今行くと、例によってシャッター街になっていたり、もの悲しくなるようなことも少なくありません。でも、最近はこちらとしたりリノベーションが行われていたり、特に魅力のある飲食店などが集客力を高めているような光景に出会うこともあります。

**島原** まさに、その通りだと思います。リノベーションでまちづくりをしようという動きのなかで目立つものはほとんど旧市街地です。とはいえ、わざわざ商店街へ行って買いたいというものがなく、Amazonの荷物で宅配がパンクしているような時代に、物販という機能が再生するのは無理。やはり飲食系、あとはインバウンドの流れを狙った宿泊が多いですね。**加藤** 飲食や宿泊以外でも、何か面白い動きはありますか?

**島原** 北九州市の小倉(こくら)などで、働く場所をリノベーションでつくるという試みが目をひきます。いわゆるコワーキングスペースであったり、あるいは地元の子育てママなどが起業できるようなショップ兼アトリエだったり。

**加藤** それはやはり、職と住の近接性が前提となっているわけですね。

**島原** そうです。東京の不動産マーケットでもい

心です。家計を支えるひとりの働き手が長い時間をかけて通勤するということを前提とした住宅地開発が続いてきましたが、今はそれを続けるのが苦しくなった。男性も女性も家で子育てをして、外でも働く。その場合、職と住は近い方がよいに決まっている。また、手に職がある人は、数年のブランクがあっても元の会社に戻るといってはいなく、コワーキングスペースなどを使ってフリーランスで仕事をする人も多い。保育所も併設されていけば、なおい。そんなニーズが大都市でも地方都市でも生まれているのだと思います。

**加藤** 小倉でそのような流れが起きているのには、背景があるのでしょうか？  
**島原** 北九州市がリノベーションスクールというのを後押しして、新しい形のリノベーションが起ころうという仕掛けをしているのが大きいと思います。空いているビルのオーナーから物件を「教材」として提供してもらい、全国から集まった研修生たちが実際にプランニングして提案するという形です。成功事例が出はじめてくると、「こういうのはいけるかもね」みたいな形で追随する動きが出てくる。

**加藤** まずニーズありきではなく、むしろ後から需要が出てくるようなイメージなんです。このエリアをどういう方向に読み替えることができるか？ 立地的、歴史的な特徴を把握して、それをこう変換できるのではないかとコンセプトを立てる。リノベーション事例がうまくいくときは、経路に1本鍼を打つと効果が広がっていくような力を感じます。

**加藤** 大阪でも今、新今宮の駅前の土地を星野リゾートが買ったというニュースが話題になってきているんです。手押し車のおばあちゃんたちがどこで買い物をするのかという、切実な問題です。京都には大きなスーパーが今、どんどんできていますが、やはり使いにくい。京都は長屋で自宅にお風呂がないという人も多いので、銭湯がひとつぶれるたびに遠くまで行かなければならない、という問題もあります。

**島原** そういえば、銭湯は高齢者にとつての素晴らしい「サードプレイス」ですよ。大都市には多くて、最近人気もあるんですけど、全体としては減ってしまっている。

## 歩くことと都市の魅力

**加藤** 都市の魅力、とりわけ商業地区の魅力というのは、基本は歩くところにあると私は考えています。

**島原** 私もそう思います。長年住んでいるまちですら、見知らぬ風景を見つける。あるいは、人と出会う、匂いをかぐ、音も聞こえる……。五感で都市を経験することが、いろんな出来事を生み出すよね。

**加藤** 日本にも、かつて石川栄耀というユニークな都市計画家がいきました。「夜の都市計画」として、歩ける範囲にさまざまなものが混在しているような商業空間をつくるべきだと考えた人です。大正後期から昭和の戦前期にかけて、余暇といえど主に仕事が終わった時間でした。「徒歩半径」のなかに、まさに「歩いて、楽しい街」をつくらうとしたんです。当時のことですから、そこには花街的な要素もありますが、ただ歩いて、見て、楽しいだけというようなものもある。

**島原** それは、ぜひ勉強したいですね。今はそう

ます。新今宮といえば通天閣のある新世界にも近く、関西空港と直結する便利な場所ですが、南に隣接する西成区の日雇い労働者の街「あいりん地区」のイメージも強く、これまでは簡易宿泊所や料金の安いビジネスホテルなどが目立ちました。

**島原** 最初に聞いたときは私も、えっ！と思ったんですが、ひょっとすると、面白いことが起きるかもしれないですね。まったく異質のものが入ること、今までなかった価値観や目線で見える人たちが増えていきますから。

**加藤** おっしゃる通りですが、あまりにもカラーが違うという意味で、半分は心配な面もあります。「あいりん地区」周辺でも最近まちなみづくりを頑張っているの、そこに大規模な資本がどんと入ってきて、下から積み上げているプロセスが台無しになることも、ありえなくはないのかなあ、と思うのです。

**島原** 確かに日本の場合、常に再開発が先に動いてしまうのが問題ですね。たとえば、ニューヨークのチェルシーでも精肉工場、倉庫、廃線跡といったものを活用した再開発が話題になっていますが、もとは倉庫をギャラリーとして使ってみるといった小さなまちの変化が出発点にありました。先に大規模なプランを置いてしまうと、どちらに転ぶかわからないという危うさも出てきてしまうのだと思います。

## 日本ならではのサードプレイスのあり方

**加藤** 自宅でもなく職場でもない、居心地のよい「サードプレイス」という概念について、どのようにお考えですか？ 私などは、つい飲み屋さんをイメージしてしましますが……。

いった「盛り場」的なものが、都市計画的な場面でまったく議論されないのが問題だと思います。夜の話だから、昼間の会議室でスーツを着たような真面目な人たちにはできないのか……。

**加藤** そういう意味でも、石川栄耀は先駆的です。「盛り場を知らずして、都市をつくるなんてことはできない」とはっきり言っているんですね。

**島原** 今の日本でそのまま使える概念なのだろうか、と少し思いますね。そもそも東京などでは、やはりファーストプレイス（自宅）とセカンドプレイス（職場）が遠すぎて、「サードプレイス」の立地が偏ってしまっています。

**加藤** そのところを無理に分離したのが、日本の近代的な都市計画の特徴ですね。電鉄資本も重要な役割を果たしたのだと思いますが、遠距離の通勤を前提としたライフスタイルが定着したことによって、働くのは男性、家にいるのは女性というような分割もできてしまった。もしかしたら、先ほどの小倉の例のように職と住の近接がこれから進むと、「サードプレイス」のあり方も変わってくるのかもしれないね。

**島原** とりわけ団塊の世代が大量にリタイアするようになりませんが、高齢者の活用を考えたら高齢者が少しでも働きやすい環境をつくる必要があると思うんです。でも、長時間の電車通勤は大変。だから、たとえば大阪でいえば泉北ニュータウンのようなところに働く場所をつくれなにか。単一用途に限った厳格な土地利用のゾーニング規制によって、コンビニすらつくるのが難しい場所ですが、高齢者の労働力を上げるといっても、郊外住宅地の用途機能をもう少し緩やかにして、さまざまな機能を「混ぜ込んでいく」必要がある。同じように、これまで「サードプレイス」を都心の職場近くにもっていた人たちが退職してしまうと定期券もなくなるので、遊ぶところもなくなる。退職して家庭以外に行き場を失ってしまった人たちが、「地元でつるむ場所」も特に郊外で必要になってくるのではないのでしょうか。

**加藤** 高齢化といえば、私が住む京都の中心部でも「フード・デザート（食の砂漠）」の問題が出てくる。素晴らしい（笑）。都市のなかにある複雑性を排除していくような圧力が強まったのは、やはり戦後でしょうか？

**加藤** 圧倒的に戦後でしょうね。かつての日本には、もっと豊かな道路空間の歴史というものがあつたと私は考えていて、それが貧困化して今の自動車優先の道路になったと感じているのです。



登録有形文化財に指定される町家の前で。大阪を歩くと、まちの記憶を受け継ぐ建造物にあちこちで出会う。



寛容性があり、自由に歩けることがまちの魅力になると語る両氏。

**島原** おっしゃる通りです。仙台の定禅寺通りなどは、世界的に見ても素晴らしい並木と歩道があるのに、オープンカフェの1軒もない。一部では見直しが始まっていますが、やはり「道路交通法」の抵抗というか、道路は食べたり遊んだりするところではないという考えが根強い。公共空間で商売をして儲けるのはけしからん、というような話も出てくるし……。同じことは水辺でも起きています。東京では、隅田川テラスという立派な遊歩道を整備しました。桜の時期は花見で賑わっていますが、お店はありません。だから、ふだんの夜はがらんとして、怖いくらい。

**加藤** 京都の鴨川沿いにある納涼床は東京の方でもご存じだと思います。でも、あれは比較的、新しい形なんです。本来の納涼床は、河原の中などで誰もが自由に入り、自由に抜けられるような、そういう空間でした。そこに屋台とか金魚すくいとか、氷屋さんとかが出てきて……。これも、河川にまつわる法律の影響で、庶民の楽しみとしてはなくなっていました。

**島原** それは楽しそうですね。確かに治水や災害

対策という観点から、「じゃあ、もし地震や火事、洪水が起きたらどうするんだ？」と言われたら、言い返せないのですが……。しかし、「だから全部ダメ」というような、最も短絡的な解決法になってしまっているのが現状ではないかと思えます。

**加藤** 福岡市が進めている、観光への屋台の積極的な活用というアイデアも面白いですよ。

### 狭い道やバリアが人を「その先」へと誘う

**加藤** 住む人にとっても安全で、外から来る人も寛容なまちというのは、具体的にどのような形でつくればよいのでしょうか？ ジェイン・ジェイコブズという人の考えは、今となっては本当に新しい。要するに見ず知らずの人が夜のバーとかレストランに集まってくることによってむしろセキュリティが高まり、安心安全が担保されるという。けれども、日本のまちづくりは、まったく逆の方向へ向かってしまっているような気がします。「スーパー防犯灯」なんかの設置に始まり、どち

らかというと異物を排除する力が強まっている。

**島原** 多種多様な人やものが共存し、外から来た人々に対しても開かれている。大阪のようなまちは特にそうだと思いますが、もともと日本の都市というのはジェイコブズ的な寛容性をもって開かれていた場所ではないですか？

**加藤** そうだったと思います。

**島原** だとすれば、まずは比較的、細い道路を大事にすることから始めて……。

**加藤** そこは本当に重要ですよ。道を広げないことです。

**島原** 東京などは特に防災意識が高いので、道路は広げるべきという考え方が一貫しています。でも自動車との共存というか、車をどこまで入れるかという議論は、もう少し丁寧にした方がいい。広い道路があっても、ほとんどの車がただ通過するだけだとしたら、たとえば駅前に大きな道路はいらんのではないかと？ という発想も必要です。

**加藤** 道路の細さは、賑わいも演出できますね。阪神・淡路大震災前後の神戸の商店街を比較してみると、道が広すぎたところは、がらんとして見える。狭いところは生鮮食品の店があるだけで、ちょっとした張り出し効果もあり、賑わいを感じられる。もちろん都市計画や消防法など、いろいろあるとは思いますが……。

**島原** 迷宮のような市場とか、先が見通せないような狭い商店街。歩きたくなる場所というのは、必ずしも歩道が広くて段差がないところを意味しないんですよ。「官能都市」の調査で、「歩ける」という指標の1番になったのは東京の文京区でした。文京区といえば、坂や段が多い、いわば「歩きにくい」エリア。その方が、逆に歩きたくなるものなのかもしれませんね。

**加藤** 起伏というのは一方でバリアになるけれども、それが逆にまちや風景の魅力であったり、「その先」へ一歩、誘う装置にもなるんですね。そして、人が歩きたくなる場所、歩ける場所というのが、最も安全で安心できるところでもある。現代の人々ももっている都市のニーズと、歴史的なまちづくりのあり方がつながるという意味で、今回のお話はとても刺激的でした。ありがとうございます。せっかくの機会ですから少し外に出て、大阪のまちを五感で感じるために歩きましょう。



島原 方丈

しまはら・まんじょう

LIFULL HOME'S 総研所長。1965年生まれ。89年(株)クルート入社。2013年3月リクルート退社、同年7月より現職。ユーザー目線での住宅市場の調査研究と提言活動に従事。著書に『本当に住んで幸せな街 全国「官能都市」ランキング』がある。



加藤 政洋

かとう・まさひろ

立命館大学文学部教授。1972年生まれ。博士(文学)。専門は文化・歴史地理学。流通科学大学助教授を経て現職。著書に『花街 異空間の都市史』『大阪のストラムと盛り場 近代都市と場所の承継学』『モダン京都』、編著に『都市空間の地理学』などがある。

# 江戸時代の学びと教え

沖田行司  
Okita Yukiji

学びとは、得た知識や情報により豊かな人間形成がされ、社会をかたちづくるためのものである。同時代の世界で類を見ないほど識字率が高かったといわれる江戸時代には、武士を育てた藩校や庶民の子どもに読み書きを学ばせた寺子屋、身分を超えた学び舎であった私塾など、様々な学びの場があった。場と密接に結びついた江戸時代における学びの実際を通して、今求められる学びの場のあり方を探る。

おきた・ゆくじ  
1948年京都府生まれ。教育史学者。同志社大学社会学部教授。専門は日本教育史、日本教育思想史。著書に『日本近代教育の思想史研究―国際化の思想承襲』、『藩校・私塾の思想と教育』『日本国民をつくった教育』、共編著に『教育社会史』など。

## はじめに

江戸時代の藩校や私塾、庶民の学びの場であった寺子屋（手習所）における教育は、一見して現代の体系化された学校組織や豊かな教育カリキュラム、多様な教育方法など、現代教育とは比較にならないように思える。しかし、教育の理想や目的、さらにいえば教育の大前提である教える者と学ぶ者の関係性においては、江戸時代の教育は、決して現代の教育に劣らない。江戸時代の藩校で学ぶ武士の子ども達は生まれながらに指導者としての誇りと使命感を養われて成長する。身分を超えて学んだ私塾では、学ぶ意義と誇りを自覚する教育が行われた。生活と繋がった内容を学ぶ寺子屋の子ども達は、読み・書き・算盤の熟達を通して、人生を豊かにする生活空間を広げていった。これら江戸の学びは、単なる知識や情報の獲得に目的が置かれていたのではなく、人間的な成熟と深く繋がっていたところにその特質が見られる。

封建的身分社会の中にあつて、農・工・商三民を統治する武士階層に求められた資質をそのまま近代のリーダーの養成に置き換えることができないのは言うまでもない。しかし、卑怯を卑しむ心や、潔く生きること、自己犠牲の精神などは武士に限らず、当時の庶民の価値観にも通底している。時代を超えて現代にも新鮮な意味を持っている。また、幕末から明治維新にかけて多くの下級武士が見せた、時代を読み取る先見性や、指導力などに、今日の日本人が及ばない「人間力」を発見することもできる。江戸時代の学びの実際に触れて考えてみたい。

## I 武士の学びと教育

江戸時代において、武士の教育には四書（論語・孟子・中庸・大学）・五経（易経・書経・詩経・礼記・春秋）などの中国の古典が基本的なテキストとして用いられた。儒学の特質は、学問が個人的または社会的な道徳実践と深く結びついているところ

にある。戦国の世が終わり、全国が平定されると、武士の役割は戦闘集団から、農・工・商の三民を統治する封建官僚としての性格を強める。武士は各藩に開設された藩校において、午前中は儒学の古典を学び、統治者として相応しい人格を磨き、午後からは剣術、弓術、馬術、槍術、水練などの武術を学んだ。文武両道という意識が一般の武士にも定着していった。武士は藩校だけではなく、その藩に特有な学びの形態、つまり日常的な生活を通して人間形成を行った。薩摩藩を例にとつて見てみよう。

### ●薩摩の教育風土

西郷隆盛や大久保利通をはじめ、明治維新を断行し近代日本を形成するにあたり多くの人材を輩出した薩摩藩では独特の教育機能を持った組織があった。

戦国大名の多くは、幼い頃より学問僧の教育を受けて教養を形成した。16世紀中ごろに登場した島津忠良（1492～1568）は日新斎または

愚谷軒と号した教養人であった。忠良は薩摩の武士の日常生活に即した教訓となる47首からなる『日新公いろは歌』を書き残している。「古の道を聞いても唱えても、我が行いにせずば甲斐なし」と歌って、古の道の知識は実践してはじめて本来の価値が生まれると説いた。忠良は、毎月定期的に家臣の子弟を集めて、「咄」という会合を開いた。四書の講義を交えて「義理の咄」や「忠義の咄」など、語り聞かせる方法で武士としての自覚を促したのである。教育の原点は「語り」であり、

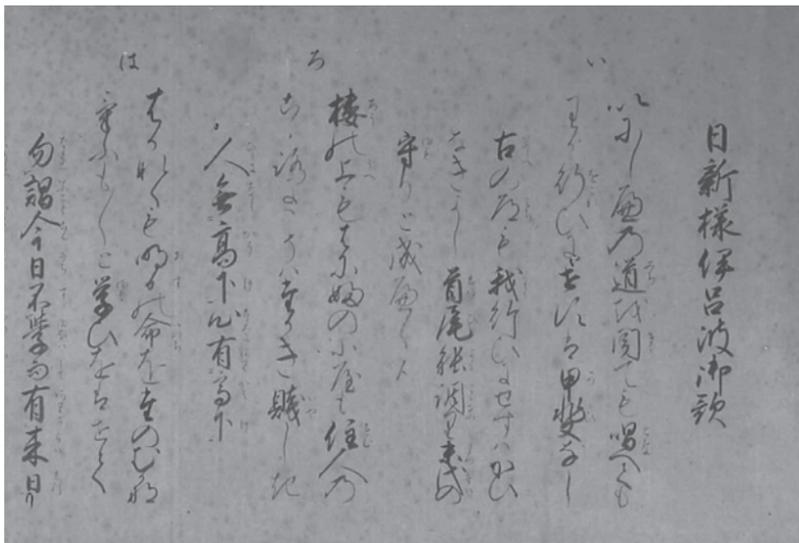
人と人が対面して、語り聞かせるところに「学び」と「教え」が成立する。こうした薩摩藩の教育風土が薩摩の人間形成に大きな影響を与えたことは注目すべきことである。これが具体的な形となって継承されたのが郷中教育である。

### ●共同生活で学ぶ郷中教育

薩摩藩の城下では「方限」という区画ごとに「咄相中」または「二才咄」と称される青少年の自主的な組織が形成されていた。「二才」とは元

服した15歳から24歳までの男子の集まりである。これ以外に6歳から10歳までの小稚児と11歳から14歳までの長稚児というように、小さい時から子ども集団を形成させ、自治能力を身につけさせる仕組みになっていた。年長の長稚児は生活全般から学習に至るまで小稚児の面倒を見ることが義務付けられていた。郷中という呼称が用いられるようになったのは享保期（18世紀の初頭）頃からといわれている。

郷中においては、共同生活を通して相互に切磋



日新公いろは歌

いろは47文字ではじまる47首の和歌に道徳・宗教を織り交ぜた和歌集。島津忠良作。郷中教育で武士の子弟教育の根幹として用いられ、藩内に広まった。所蔵／尚古集成館



島津忠良像

儒教、仏教に教養が深く、近世島津氏の基礎を作った。所蔵／尚古集成館





山片蟠桃像

懐徳堂が輩出した、商人であり学者であった山片蟠桃。  
写真提供／大阪大学懐徳堂研究センター



懐徳堂

1724年、大坂の豪商「五同志」が出資し、三宅石庵を学主に招き開設。大坂の学術発展と商道德の育成に貢献した。  
写真は1916年に再建された重建（ちょうけん）懐徳堂。  
所蔵／一般財団法人懐徳堂記念会



適塾

1838年、蘭学者で医者であった緒方洪庵が設立。幕末から明治に活躍する人材を数多く輩出。国内唯一の蘭学塾の遺構として現存する。  
写真提供／大阪大学

### ● 師匠とテキスト

寺子屋の師匠は、農村では僧侶や神官、または隠居をした農村の指導者などが多く、無料で子ども達に文字学習の機会を提供していた。都市部では職業としての寺子屋の師匠が増え、城下町では武士や町人、大都市では多くの女師匠が存在していたといわれている。また、浮世絵などには、女性が自分の子どもに読み書きを教えている姿も描かれている。江戸時代には、女性に学問はいらぬという意識で識字率が低かったといわれているが、女性を対象とした読み物も多く出版されているところからも、文字学習が広く女性の間にも浸透していたと理解できる。夫婦で寺子屋を経営することも珍しくはなかった。午前中は共通の文字学習で、午後からは女の子は裁縫や三味線を、男の子は算盤というように、極めて実用的な学習が用意されていた。寺子屋で用いられたテキストは「往来物」と呼ばれ、大坂のような商業地域では商売に必要な文字からなる『商売往来』『問屋往来』『農業地域では『百姓往来』『農業往来』、漁村では『船方往来』などがあり、生活に即した内容から構成されていた。全国に共通したものには『庭訓往来』『実語教』などがあり、人として求められる教訓や日常生活に必要な知識や年中行事などが盛り込まれていた。

江戸時代の子ども達はこうして寺子屋（手習所）で読み書き算盤を学ぶのであるが、子どもから大人になる教育システムは、様々な年中行事やお祭りなど子どもを取り巻く地域社会が持っていた。これらの行事を通して、共同体の一員としての自覚を深めるのである。また12〜13歳で寺子屋を終えた子ども達は奉公先の商家や職人の親方を通して「一人前」として成長する。商家の主人は親で

あり師でもあった。子ども達は商売について学び、能力のある者は暖簾分けしてもらい、独立していった。職人の親方は技術の伝承だけではなく、職人として相応しい度量と生き様を学ばせた。

### III 自由な学び舎——私塾

#### ● 大坂町人の学び

江戸時代に入ると、還俗した僧侶や学問を志す町人や武士が登場して私塾を開設するようになった。日本朱子学の祖といわれた藤原惺窩やその弟子で徳川幕府の官学の祖といわれた林羅山は相国寺や建仁寺を出て市井で朱子学を説いた。京都の上層町人出身の伊藤仁斎は古義堂で教え、大洲藩士であった中江藤樹は武士を放棄して近江国高島郡で藤樹書院という私塾を開いた。

「天下の台所」や「商人の町」として知られた大坂でも多くの私塾が開設された。江戸の中期に「五同志」と呼ばれる豪商達が出資して開設された「懐徳堂」は朱子学を教授し、山片蟠桃や富永仲基など独創的な町人学者を輩出した。山片蟠桃は合理的な考えに基づき日本の神代以来の歴史を批判的に考察し、西洋の天文学の成果に基づいて地動説をと考えた。また、富永仲基は仏教各派の教義の発展史を考察し、後から付け加えられた（加上）教義ほど複雑な様相を呈して、必ずしも仏陀の教えそのものといえないと論じた。

江戸の中期から後期にかけて新しい学問である蘭学が普及し、長崎や大坂、江戸を拠点として蘭学塾が開設されるようになった。大坂では多様な蘭学塾が開設されたが、そのなかで緒方洪庵が設立した「適塾」では、「教えられる」よりも「学びとる」ことに重きが置かれ、能力主義のもと、

塾生の切磋琢磨によって最先端の医学知識が学ばれた。とくに驚くべきは、緒方洪庵がベルリン大学のフーフェランドの著書を翻訳して医の倫理について言及していることである。最先端の知識と技術を持った医師がこの世に存在するのは、自分のためではなく人のためであるので、医者は安逸を願うのではなく、名声や利益を顧みずに人を救うことだけを願うべきであると説いている。また「病者に対しては病者を見るべし、貴賤貧富を顧みることなかれ」と述べ、医師の報酬は富者の与える手から零れ落ちる金銀ではなく、貧者の両眼から溢れる感謝の涙であるとも説いた。これらは適塾の教訓として学ばれ、ここから日本赤十字社の基礎を作った佐野常民や窮民医療に尽くした高松凌雲のような、高い志を持った人物が輩出した。「懐徳堂」や「適塾」は、利益を最優先する商業都市という大坂のイメージとはかけ離れて、合理的で独創的、かつ人間性豊かな学びの「場」として全国に開かれたものであった。それは商人が経済的にも相対的に自立して生活した大坂という地域が持つもう一つの個性から生まれたものに他ならない。

武士を育てた藩校や庶民の子どもに読み書きを学ばせた寺子屋、それに身分を超えた学び舎であった私塾も、それぞれの地域が持つ個性や教育力に支えられていたからこそ、その教育効果を挙げることができたのではないだろうか。地域が持つ豊かな教育力、それはお祭りであったり、子どもの誕生であったりお葬式であったりと、地域の人々を結びつける様々な行事を通して形成されてきた。地域が固有の学びの場となったとき、学校教育も本来の機能を取り戻し、また独創的で、人間性にとんだ学問が生み出されるかもしれない。

# 外からの目で上方文化の本質に迫る

## 「大阪・和の暮らしを体験する会」成果報告より

2017年2月、3日間にわたって、大阪で外国人を対象にした「大阪・和の暮らしを体験する会」が開催された。それを受けて2日後には「『上方の生活文化』を考えるシンポジウム」を実施。本レポートでは、二つのイベントの紹介を通して、現在のインバウンド対応だけでなく、今後の東京オリンピック・パラリンピックの後をも見据え、日本や各地域がこれから世界に向けて何を発信していくべきかを考える。

鶴見佳子  
Tsunemi Yoshiko

つるみ・よしこ

文筆家。新聞社勤務を経て1989年フリーランスに。住まいと暮らしを中心に多様な媒体で取材・執筆、企画立案・編集を手がける。講演やファンリターターも得意。2012年からアマチュア落語家「大川亭知どり」として落語の上演と創作を開始。お遍路と巡礼を実践的研究中。名古屋出身、大阪在住。

### 200年前のまち体験 ——大阪を見る・聴く・味わう・感じる

#### 大阪くらしの今昔館訪問

和の暮らしを体験する会を催した大阪くらしの今昔館（以下、今昔館）は2001年に開館し、1830年代・天保年間の大阪のまちを再現している。建具や展示物を手に取ったり、路地に入り込んだり、暮らしの目線で楽しめるのが魅力的だ。年間利用者は2014年度の36万人から16年度57万人へ急増し、半数以上を外国人が占める。浴衣の着付けサービス（30分・500円）は、1日300人の枠が毎日完売する

ほど人気だ。自由に撮影ができ、自撮りしてSNSに発信すると、それを見てさらに来館が増える。

落語家の故・桂米朝の案内アナウンスを聞いてから木戸門をくぐると、江戸時代のまちに吸い込まれる。風呂屋や本屋、唐物屋、町会所、薬屋などがつくられ、町家の内部には座敷や竈（かまど）、走り（流し）、水壺、井戸が効率的に配置されている。

一方、裏長屋には大工や青物売り、義太夫節の師匠が住んでいるという設定で、それぞれの暮らしが演出されている。当時の賃貸住宅のシステム「裸貸し」も見てとれる。江戸時代の大阪では、長屋の家主はスケルトン（構造躯体）を所有し、畳も竈もインフィル（内装・設備）はすべ

て店子の持ち込みだった。現代でいうSI住宅の仕組みが大坂にはあったのだ。

井戸端という共用空間はコミュニティの核であり、トイレやゴミの回収の仕組みは現代をしのぐエコシステム。町角や家の中に犬や猫、ねずみの置物が仕掛けられ、来場者に人気の撮影ポイントとなっている。

能楽や歌舞伎など本格的な古典芸能をいきなり鑑賞するのは難しいが、住まいと暮らしがテーマなら敷居が低い。学術的に裏付けられた専門博物館だからこそ見ごたえがある。多角的に楽しめ、何度行っても飽きない。「インバウンド」という外的要因と、SNSの発達が昨今の入場者増を支えています。これをいかに深化

れた人と交流を楽しむ。お仕着せでなく、200年前を再現した空間で着ることが体に響いたのだ。

演劇『大坂町家劇場』に対しても高評価をつけた。

「役者たちはとても上手で、多いに楽しんだ」（インドネシア・30歳）

「笑いの中から商人のまち、大坂のありかたが見える」（中国・32歳）

館内には他の見学者もいて混雑していたが、演劇に引き込まれていた。多言語に対応したタブレットも配布されていたが、あまり活用せず直に楽しんだ。体験会の外国人たちはなぜ楽しめるのか。言葉は時に観光や交流の壁となることもあるが、それを超えて楽しめたのは、まさに彼らが「外からの目」をもち、初めて見た「本格的な上方文化」に興味津々であり、あらゆる角度から楽しめる工夫を主催者や関係者が丁寧に企画し、ともに実践しているからなのだ。

200年前の大坂を再現した今昔館は、その壮大さと緻密さに魅力がある。体験会の参加者が感動したのは、単にハードの立派さだけではない。

「日本の町家は、昔の日本人の知恵を表している。昔の生活の中には不便さもあると思うが、日本らしさが感じられた」（ベトナム・24歳）  
「商家の大戸、板戸、無双窓など、建具がとても興味深い」（ドイツ・25

歳）

ぼったり床几や箱階段、ひもを使って開閉する台所の高窓など、狭い町家を有効に使うための建具や工作技術、暮らしの工夫に感心した人が多かった。「大坂のまちは狭いと感じた」と感想をもらした人もいた。大坂の狭さは、大坂の地域文化が成り立つ原点でもある。多くの人口が狭い土地に集まったからこそ、コンパクトな住まいや暮らしが工夫され、活気を生み、人と人の距離感を近づけた。そんな大坂という地域文化の本質を感じ取った外国人がいたということだろう。

#### 近世・近代の音楽を聴く

「上方の生活文化」を考えるシンポジウム会場に、日本テレマン協会の演奏が響いた。ジョスカン・デ・プレの名曲『千々の悲しみ』は、日本に帰国した天正遣欧使節が天正19（1591）年に演奏し、豊臣秀吉が3度もアンコールを求めた曲だという。宣教師を介し、最初に西洋音楽を聞いたのは織田信長だったと言われ、その次が秀吉。西洋から届いた初期バロックに感動したであろう秀吉に想いを馳せる。

同協会の創設者、延原武春氏は「西洋の音楽はキリスト教とともに日本に伝わり、最初はカトリックの、次いでオランダから出島を介してプ

### イベントダイジェスト

#### 大阪・和の暮らしを体験する会

実施日 2017年2月4日(土)～6日(月)の3日間  
12:15～18:00

会場 第1部 大阪くらしの今昔館(大阪市立住まいのミュージアム)

第2部 吉田家住宅(登録有形文化財)

外国人を対象に開催された「大阪・和の暮らしを体験する会」は、内閣官房オリンピック・パラリンピック推進本部事務局が委託し、平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査の一環として、大阪くらしの今昔館が主催、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)が協力したプロジェクト。体験会には3日間で17か国・58人の外国人が参加した。

第1部は、参加者全員が和装で今昔館の中を歩き、200年前の大坂のまちと暮らしを体感。プロの俳優たちと今昔館のボランティア「町家衆」による演劇『大坂町家劇場』(演出・構成・台本 上田一軒)を楽しむ。

第2部は、現存する築96年の吉田家住宅で、家主の吉田齋氏の挨拶と、谷直樹今昔館館長による解説を受けた後、書道、茶の湯、上方舞を楽しむ。建築や住まいの「しつらい」、暮らし方とともに、もてなしの心、礼儀作法やルールに触れる。

#### 「上方の生活文化」を考えるシンポジウム

実施日 2017年2月8日(水)13:30～17:15

会場 大阪市立住まい情報センター 3階ホール

「大阪・和の暮らしを体験する会」を受けて開催され、180人が参加した。大阪市住まい公社の蟹恒三理事長の開会挨拶、オランダ王国のローデリック・ウォルス総領事の来賓挨拶に続いて、3日間にわたる「大阪・和の暮らしを体験する会」の映像を鑑賞。上方舞・書道・茶の湯・大坂料理・音楽演奏がホールで披露された。

谷直樹今昔館館長が「大阪・和の暮らしから、なにを学ぶのか」と問題提起。それを受けて参加者による討論会「和の住まい文化を考える」を実施。異文化コミュニケーションにおける問題点や総合交流のあり方など、活発に意見を交換した。





プロの俳優が薬屋の旦那さんやご寮さん、丁稚などに扮して外国人参加者を案内する。江戸時代の大坂弁ながら軽妙な演技で参加者の緊張をほぐす。



日本テレマン協会が、400年以上前に大坂に流れた楽曲をリユートで奏でる。秀吉と同じ曲を聴いているという感動が会場に広がる。



江戸時代からの系譜をふまえ、現代的視点を融合して、梶山一希氏が再現した「本膳料理」は今昔館が保有しているお膳や食器に盛られた。



身長と洋服のサイズに応じて着付師が和装一式を用意して参加者に着付け、美容師が髪を結う。イスラム圏からの参加者はヒジャブを被って和装姿に。



今昔館を支えるボランティアの「町家衆」が、大工や青物売り、長屋のおかみさんに扮している。参加者は言葉の壁を超え、等身大の大坂を楽しんでいる。

ロケスタントの楽曲が伝わった」と話す。この日、演奏されたJ・S・バッハの『G線上のアリア』も出島の人々が手持ちの楽器で弾いただろうと延原氏は話す。

キリスト教の禁止と鎖国で、西洋音楽はいったん姿を隠すが、江戸末期、ペリーやロシアからの使節団の来日で再び扉が開く。明治期には雅楽の奏者が和楽器をバイオリンやオーボエに持ち替え、鹿鳴館時代の音楽を支えた。

バイオリニスト兼作曲家のフリッツ・クライスラーは大正時代に来日し、中之島の中央公会堂で演奏して

いる。名曲『愛の喜び』も大阪に影響に違いない。大正時代からの時間がぐつと縮まり、楽曲が違った表情に見える。

同協会代表の中野順哉氏は、「外国人との交流に際し、ある程度、言語を超える体験が音楽にはできる。音楽には過去から分断されたものと、現代まで共有されているものがある。過去から分断されていないものは日常生活の中にある。もっと音楽文化の体験と交流の機会を」と話す。

### 大坂の食を味わう

江戸時代、長崎に入ってきた医薬

「基礎となる食材の合わせ方や考え方は江戸時代も今も同じ。その思想は、現代の上方料理に脈々と伝わっている。調理技術や道具はどんどん進歩したが、よりおいしいものを食べたい・作りたいという想いが現代の『懐石』につながった」と梶山氏は話す。

### 100年前の暮らし体験

大阪に暮らす・生活文化を体験する

### 吉田家住宅で体験する 100年前の住空間

今昔館での体験会の後に参加者た

ちが訪れた吉田家住宅は、1921年に建てられ、家主の住む主屋と、路地をはさんで15戸の長屋（賃貸住宅）から成っている。普段は非公開で、今も普通の暮らしが営まれている。

周りはビルやマンションばかりだが、戦争や震災の被害を免れた吉田家住宅だけが、およそ100年前の住空間を維持している。主屋は2008年に国の登録有形文化財に登録され、数年前に耐震改築が行われた。

吉田家住宅の主屋は、店の間がない、居住専用の仕舞屋という造りを

している。表に高い塀を巡らせ、格子戸を開けると前庭、その奥に玄関がある。1階には8畳、6畳の和室と台所。8畳の部屋は廊下（縁側）を通して小さな庭に接し、内から外へ空間の広がりが見えて実際の面積より広く見える。

座敷は最も格式の高い部屋で、床の間や違い棚には季節や催事に合わせて、掛け軸や生け花、人形などを飾る。これらを「しつらい」といい、日本人のおもてなしの精神を表している。障子や襖で空間を仕切る日本の住まいは、開放的である一方、外と内の境界があいまいだ。8畳と6

品は、大坂の道修町で検査され、国内に流通した。長崎奉行所の役人が大坂に立ち寄った時にふるまわれたのが「本膳料理」。上質な料理屋には全国から豊富な食材が集まっていた。文化10（1813）年、道修町3丁目の会所で、長崎奉行関係者に供された献立が、大阪府立中之島図書館蔵の資料「御附用御献立 明石屋季助」に残っている。これを読み解き、谷直樹今昔館館長や学芸員から、当時の時代背景や人々の暮らし方を学び、現代的視点で本膳料理を再現したのが大阪市北区の日本料理店「かこみ」店主、梶山一希氏だ。

本膳料理は、形態から食材、調理技法、盛りつけまで一定の型にはまっている。あわびを皿に盛り合わせる時には、同じ磯の香りの青のりを合わせて三杯酢をかける。高級食材の伊勢海老はハレの日の献上品に使う。鯛の塩釜焼きは塩で蒸して旨味を凝縮し、笹の香りをつけ、鯖のわら焼きは串に刺して、わらの炎でいぶしてよい香りをつける。それぞれ味覚と嗅覚の融合を楽しむ。いくつものお膳に盛りつけて同時に提供し、客は3時間ほどかけて食べる。1品ずつ客のペースに合わせて提供する現代の接待料理「懐石」とは違う。

畳の部屋は襖を取り払うことで14畳の大空間になり、これを続き間という。

ここで茶の湯と書道のワークショップが開催されたとき、襖は閉められたが、欄間を通して隣室のあかりや気配は伝わる。部屋の間仕切りに欄間をつけるのは、二つの部屋が別々でないという意味で、吉田家の欄間には住吉大社の反り橋や高灯籠が彫られている。

吉田家住宅は、大阪の近代における都市住宅（町家）として典型的な建築様式を「保存」していると同時に、住み続けることによって大阪の



襖を開け、屏風と燭台を置いたら座敷が舞台になることに驚く参加者。能楽の武家文化の影響を受け、町人が上方文化の粋として育てた上方舞を鑑賞。



体験会を終え、参加者たちは熱心に感想を寄せてくれた。外からの目が、普段、日本人が意識していない日常の暮らしの価値に気づかせてくれる。



吉田家住宅の美しい「しつらい」。座敷は最も格式の高い部屋で、季節や催事に合わせて床の間や違い棚に掛け軸や生け花などが飾られる。



吉田家住宅は路地をコンクリートにせず土のまま残している。「その方が子どもを育てるにはいいでしょ」と話す、家主、吉田齊さんの優しいまなざし。



「茶の湯は、日本人のまじめな性格を体現している」「茶道は、人を落ち着かせる」などの感想が寄せられた茶の湯のワークショップ。



手本を見たり、講師に手を添えてもらって体験した書道のワークショップ。「昔の記憶がよみがえって静かに過ごせた」と話すのは中国からの参加者。

住文化や生活文化を「活用」している。釘を使わない工夫や、収納としての箱階段、通風や採光を阻害せずにプライバシーを守る格子などを見ながら、日本建築の仕組みと日本人の暮らしの知恵は外国人に確実に伝わっていく。

### 大阪に伝わる生活文化

今もここで生活が営まれていることに新鮮な魅力を感じていた。

#### 茶道から書道、上方舞まで

「縁側と座敷の活用にはぬくもりがある。木造住宅なので防寒性は低い」(中国・23歳)

「部屋を大きくしたり、小さくできるのがいい。私の家にはそんな楽しみがない」(中国・23歳)

住まいの細部や暮らし方の工夫に気づき、自分の暮らしと比較する。

吉田家住宅で茶の湯のお点前を披露したのは、大阪市役所の茶道部。「足を崩してもいいですよ」と言われても参加者は正座し、神妙に挨拶の仕方やお茶の作法を習う。

茶の湯体験は初めてという人も多かったが、参加者たちは単に「抹茶と和菓子がとてもおいしい」と喜ぶだけでなく、茶道の精神や芸術性、上方のおもてなし文化に深い意義を見いだしている。

「驚くべき味わいがあり、興味深い芸術でもある」(フランス・23歳)

「亭主から歓迎されていると感じた。そんな文化を日本人が守っていることが好きだ」(ジャマイカ・32歳)

一方、書道を指導したのは玄風書道会の書道家、角谷天楼氏。参加者は「寿・和・花・夢・茶」などの文字を書き、筆の使い方や紙の押さえ方など手をとって教えてもらう。「上手ですよ」と褒められ、書をしたためた半紙を土産としてうれしそうに持ち帰った。

「おもしろい実技。何年も練習しなければきれいな漢字は書けそうにな

い」(アメリカ・51歳)という感想もある一方で、「母国にも書道があるが、書いたことがないので、とてもいい経験。筆の握り方の違いにも気づいた」(中国・23歳)というように、もともと筆や紙を使う歴史や文化のある中国人でも、日本の書道への魅力を発見したことがおもしろい。

吉田家住宅では、襖を取り外し、屏風と燭台を置くと部屋が舞の舞台に変わった。江戸時代に上方で生まれた上方舞は、上方の町人文化の粋として愛され、洗練されてきた舞踊だ。座敷に屏風をたてて格調高く舞うことから、「座敷舞」とも呼ばれ

る。上方舞のワークショップでは、山村流の舞手、山村若女氏、山村若瑞氏、山村若愛之氏が『江戸土産』『黒髪』『鐘ヶ岬』を舞った。「多様な表情があり、深い意味のある舞だと感じた」(マレーシア・26歳)など、参加者たちは舞の美しさに感動していた。

### 上方文化考

上方の生活文化・おもてなしとは何か

17世紀以降の京・大坂地方を「上方」と呼ぶ。特に、水陸の交通が便利だった大坂には全国から物資が集り、経済・金融の中心地「天下の

台所」となった。人と荷が乗り換えられ、積み替えられ、換金され、知と情報が交換され、人が交流し、儲かる仕組みをつくりあげた場、それが上方だった。

交通・物流・人の交流からなるネットワークが形成され、お互いが影響しあった。上方へ行けば何か新しいモノ・コトがある、新しい価値に変換できる。それを求めてすべてが上方へ集まる。そのトランスミッシオン性が、かつての上方の地域文化の本質だった。

同時に、上方では豊かな町人文化が育まれた。井原西鶴や近松門左衛門などエンタテイメントの担い手だけなく、町人学者や文化人を多く輩出、さまざまな芸術や技術が進歩した。暮らしをとりまく生活文化そのものが発展し、「粋」という言葉で表されるようになった。上方のおもてなし文化もここで育まれたのだ。こんなルーツをもつ普段の暮らしや住まいを外国人に体感してもらおうことで、上方で培われた地域文化、ひいては大阪というまちのアイデンティティを伝えていけるはずだ……。

今昔館が開催したプロジェクトはそれを問いかけた。単に、和装や茶道でニッポンを「チラ見」させただけではないのだ。さらに、このプロジェクトからおもてなし文化を知ることができた。外国人が今昔館で再現されている唐物屋や本屋、薬屋に興味を示すのは、そこに「日本オリジナル」を見いだせるだけではない。ヨーロッパから伝来した医薬品や道具、日本から欧州に流出した浮世絵などによって、自国と日本の間の交流の歴史を知ることができるからだ。中国人ははじめアジアから来訪する人は、自国で姿を消しつつあるかつての歴史や建築、宗教性を日本に発見したり、住まいと暮らしに関する共通点を見いだしたりする。自分との共通性を感じると感動は多重的になるし、共通性は相互理解を促してくれる。



今昔館や吉田家住宅での体験会の様子が上映された後、茶の湯・書道・上方舞・料理・音楽などの上方文化がステージでも披露された。



さまざまな国籍や職業の180人が参加した『上方の生活文化』を考えるシンポジウム。上方文化に対する現代人の知識や発信力についても考えさせられた。



シンポジウムでは、外国人参加者からのコメントも多く寄せられた。写真は関西在住のアメリカ人の女性。

かつて上方を貫いたおもてなしの精神は、現在の大阪ではどうなのか。谷直樹今昔館館長は「大阪人の一人ひとりにはフレンドリーで、流暢な外国語を話せなくてもわかりやすい日本語で伝えたり、体で表現したり、会話を楽しみながら売り買いできる。そこが東京とは違う点で、大阪人のパフォーマンス力は最大の強み」と話す。上方の地域文化を伝える博物館のあり方については「集客施設として来場者を『飲み込む』だけではなく、こちらから『まちへ出ていく』ことも大切。今回は今昔館と吉田家住宅のように点と点がつながっ

### シンポジウムの成果

「和の暮らしを体験する会」を受けて、2日後に『上方の生活文化』を考えるシンポジウムが開かれた。在阪の総領事から国内外の公的機関に勤務する人、働いたり学んだりしている外国人、体験会の参加者、歴史学や観光学の研究者、会社員までいろいろな国籍や職業の老若男女180人が参加した。冒頭で谷直樹今昔館館長は次のように話した。

「水運によって大坂は繁栄し、現在の大阪市章が水路を示す濠標<sup>（おほりすゐり）</sup>であることにもつながる。19世紀に大坂観光にきた人は鴻池や住友、加島屋などの豪商の家を見物した。商売の駆け引きを行う上で、上方のおもてなし文化が育まれた。季節毎の住まいのしつらいや茶の湯などにも、おもてなし文化が見てとれる。これから、上方の文化と諸外国との文化を比較しながら、相互に理解・融合できる基盤づくりを進めるとともに、私たちも改めて上方の文化に目を向け、大阪のおもてなし文化を今一度、創造していきたい」

「上方文化をどう感じ、何を学んだのか」という問いに真っ先に手を挙げたのはベトナムからの留学生だった。「着物を着て、200年前の大阪の町に入り込み、本当に日本らしさを感じた。演劇では昔ながらの生活と住宅の説明がわかりやすかった。男女共用の風呂屋、長屋に住む人たちの様子、人々のおおらかな暮らしぶりや近所付き合いを身近に感じた。昔の建物では鍵を使わない、箱階段で空間を有効に使う、通風・採光の役割を果たしながらプライバシーを守る格子などに、建物の工夫と日本

人の知恵を見た。書と上方舞は初体験で楽しかった。私は少数民族の出身で、母国では経済発展に伴い都市化が進み、少数民族の住まいや文化が失われつつある。生活文化を受け継ぐことは何か、どう守るべきかを改めて考えさせられた」

大阪で働く人からもいろいろ提起された。フランス人からは「日本語がわからないため、理解できないこともあった。伝えるという点では是非改善してほしい」。プロダクション経営の日本人は「今昔館では町家衆がまちの空気をつくっている。表面的なことだけでなく本物を伝えることが大切。言語を超えたところで伝えるにはまだまだ足りない点が多い」

グローバルな時代に、言葉という点で国際化への対応策は必要だが、言葉に頼らずに魅力や感動をどう伝えるかという発想も、これからの交流や観光を考える上では大切だろう。

### 大阪人がインバウンドの担い手となるには

人を吸い寄せる世界の魅力的な都市と競い合った上で、大阪が生き残れるかどうかには、長期的な戦略がいる。

体験会の参加者がこれから希望する文化プログラムの1位に「日本建

築、和風住宅」を挙げた。体験会を通じて外国人は「つくり込まれた住空間のしつらい」「スマートな住文化」「人の礼儀作法や規律」に魅力を見いだし、それが大阪の地域文化だと認識している。これらに対して日本人から「私自身、大阪の生活文化について説明・紹介できないことがわかった」（日本・39歳）など自省の発言も少なくなかった。

地域文化を知る上ではさまざまな体験をし、人が交流し、理解しあうプロセスが必要だ。「異文化への接触には、見学・体験・交流という流れがある。『観光』とは見学すること。『観風』とはその土地の風にあること、つまり土地の人と交流することを意味する。観光と観風を意

識し、今後の交流に生かすべきだ」と歴史学者の高島幸次氏は提言した。インターネットで何でも簡単に情報を検索・収集できる時代だからこそ、現場に行くことでしかわからない地域文化に触れ、体験し、国境や時代を超えて「共感」を呼べるか否かが今後のインバウンドの肝ではないか。それへの備えや戦略を考える上で急務なのは、実は大阪人自身がかつてと同じようにトランスミッションの担い手となることではないのか。インバウンドの受け手が、大阪（上方）という地域文化の本質を理解し、魅力をきちんと発信してこ

そ、この先も外国人観光客にリピートしてもらえる。

果たして今の大阪人は、自分がインバウンドの担い手、交流の支え手だと意識できているだろうか。魅力的な地域でなければ、外国人がそのうち消えてしまう危機感をもっているだろうか。

目先のインバウンドへの対応も大切だが、東京オリンピック・パラリンピックを経て、その後続く時代の都市のあり方や観光戦略を考える上で、地域は自らの根底にある「地域文化」に改めて着目する必要性に迫られている。

「そのためには、地域の歴史を学ぶ必要がある。過去の住まいや暮らしの中には、現代人にはすでに異文化となった事例もあるからだ。ただ、誰にでも原体験はあるのだから、その上で学んだり、古くからの知恵を掘り起こしたりする機会を積極的につくりたい。グローバルの時代だからこそ自国や地域の歴史の理解が必要だ」と谷直樹今昔館館長は言う。

自らの歴史をひもとき、自分の属する地域の本質を知り、自分たちのアイデンティティがどこにあるか、ともすれば見失いがちな生活文化を見直してみる。多彩な専門家や研究機関とともに「将来、どんな大阪でいたいのか」「どんな人に来てもらいたいのか」「そのために何をしたら

いいか」「地域文化をどう再生するのか」と意見交換をする。博物館や美術館などが集まる拠点と協働を図り、交流のネットワークを広げて参画するのも大切だ。

「外からの目」にヒントをもらい、「外からの声」に耳を傾ける。彼らが魅力と考える価値をしっかりと認識する。表層的なことや利他的なことではなく、どうもてなしたら本当に楽しんでもらえるのか、ひいてはこのまちに興味を持ち続けてもらえるのかを考える。交流を支えるのは人であり、まちの魅力は人から伝わることをもつと意識したい。誰だっ

「親切な人がいるまち」や「魅力的な地域文化を実践しているまちや人」は忘れないものだ。インバウンドに対してどんな一歩を踏み出すのか、試されているのは自分自身なのだ。大阪人は覚悟を決めるしかない。

協力・データ提供  
大阪らしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）  
大阪ガス（働エネルギー・文化研究所）  
参考文献  
「上方文化・ルネッセ研究会調査報告」（田中三三まとめ）

■図1：20のエリアタイプの特徴 | 全国18万の町丁目の特徴がエリア別に浮かび上がる。

No.	エリアタイプ名称	平均年齢	単身世帯比率	世帯年収	消費支出(月額)	非消費支出(月額)	普通自動車保有率	軽自動車保有率	金融資産額	負債	持ち家世帯比率	主世帯の世帯面積	首都圏(1都3県)の構成比
		歳	%	万円	円	円	%	%	万円	万円	%	(㎡/世帯)	%
CL1	40代エグゼクティブ層が多く住む都心地域	42.6	44%	952	247,035	205,761	58%	7%	4,577	717	54%	77	94.6%
CL2	高学歴なシニア夫婦世帯が多い地域	47.9	18%	578	253,691	105,360	65%	29%	2,346	465	87%	107	39.5%
CL3	高齢夫婦が多く住む郊外地域	49.4	25%	496	230,455	87,587	65%	42%	2,108	444	78%	112	9.8%
CL4	生活を切り詰める高齢三世帯世帯が多い農山村地域	50.1	13%	460	257,383	79,996	71%	69%	1,810	238	97%	165	4.7%
CL5	若い公務員が多く住む郊外地域	40.9	38%	509	198,650	90,453	61%	28%	1,976	400	45%	77	25.0%
CL6	日本における平均的な地域	44.0	24%	514	223,216	91,224	66%	34%	2,085	430	69%	95	32.5%
CL7	三世帯同居が多い地方	48.6	18%	460	237,686	80,106	70%	56%	1,872	352	88%	138	11.8%
CL8	40代のアップーミドル層が多い郊外地域	42.2	35%	632	222,848	118,703	60%	16%	2,476	551	58%	77	65.9%
CL9	経済的に豊かでないシニア層が多い郊外地域	47.3	26%	415	208,731	71,121	64%	45%	1,661	392	72%	101	8.2%
CL10	小さな子供と住宅ローンを抱えた世帯が多い郊外地域	36.1	18%	527	214,628	94,652	73%	34%	1,867	864	77%	101	25.0%
CL11	核家族世帯からなる平均的な郊外地域	43.4	17%	521	239,767	92,566	74%	43%	2,015	462	83%	116	17.9%
CL12	比較的若い製造業従事者が多い地域	40.5	31%	559	216,616	101,075	67%	36%	1,992	435	57%	95	10.6%
CL13	後期高齢者2人世帯が多い純農村地域	52.3	26%	402	218,658	68,912	63%	54%	1,762	297	87%	125	4.8%
CL14	高齢化が進みつつある郊外地域	47.8	15%	519	256,726	92,137	73%	57%	2,068	361	93%	152	6.2%
CL15	富裕層住宅地	44.1	45%	788	226,951	168,693	56%	11%	3,564	693	56%	76	62.7%
CL16	経済環境が厳しくカードローンニーズも強い地域	44.4	34%	435	181,075	75,233	55%	25%	1,774	294	32%	66	33.4%
CL17	20代単身の借家世帯が多い地域	43.7	58%	474	172,709	82,894	53%	21%	1,947	355	34%	60	24.8%
CL18	共同住宅に住む住宅ローンを抱えた30~40代が多い地域	40.4	32%	600	221,813	112,634	62%	16%	2,418	718	66%	73	45.5%
CL19	若い単身世帯が多く住む都心地域	40.8	57%	557	187,347	101,584	56%	11%	2,120	482	36%	59	58.1%
CL20	10代の子供を抱えた4人世帯が多く住む郊外地域	39.7	21%	542	225,116	97,679	70%	32%	2,006	528	71%	95	32.2%
	全国平均	43.9	33%	529	214,406	96,034	63%	31%	2,110	456	62%	91	30.0%

注：金融資産は預貯金、有価証券、貯蓄性保険を含む  
出所：NRI「マーケット・トランスレーター」をもとに作成

# 都道府県と旧令制国では、 地域の特性が際立つのはどちらか 最新のマーケット・データの比較分析から

現在の日本では、明治期以降に定められた行政区分に沿って地域の特性を考えることが多い。

しかし、実際はそれ以前の令制国区分による影響が色濃く残っている。本レポートでは、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所との議論を踏まえ、(株)野村総合研究所の最新のマーケット・データ分析により、その実態を明らかにする。

## はじめに

一般にマーケットを分析する場合、多くの地域別分析では、エリア別(北海道、東北など)や都道府県別に対象を区分することが多い。しかし、現在の行政区分は1871年に実行された廃藩置県の後、府県の統合が繰り返して行われてきた歴史の浅いものであるため、必ずしも地域の特性を十分に反映しているとはいえない。例えば大阪府は、もとは摂津国・河内国・和泉国から構成され、それぞれ異なる生活文化・伝統文化を築いてきたため、大阪府一括りで見るとはならず、3国別で見るとはよりはっきりと地域性を捉えられる

可能性がある。また、大阪府のみならず、日本全体の特徴としても、気候や風土の多様性に依りて様々な地域性が存在し、それぞれに文化が醸成されていったことを考えると、旧令制国のように、地形的・気象的・文化的違いにもとづいた区分によって地域性を見ていくことは重要である。

本報告では、近畿の世帯を現府県区分と旧令制国区分に分けてみたときに、区分によって世帯構成にどのような違いが見られるかを、野村総合研究所の「マーケット・トランスレーター」を使った分析結果により紹介する。

## 全国18万世帯を20のエリアタイプに分類

マーケット・トランスレーターとは、消費者の住所をもとに「町丁目単位」で分析が可能となるGIS (Geographic Information System: 地理情報システム) である。マーケット・トランスレーターには、エリア別に公開されている国勢調査等の統計データをもとに、所得、預貯金、有価証券、貯蓄性保険などの金融資産額等を独自に推計したデータを町丁目別に蓄積している。これらのデータを使って、似た性質のものをグループニングするクラスター分析と呼ばれる統計的手法により、全国18万

## 現府県別・旧令制国別に見る世帯構成の違い

まず、現府県における世帯クラスター分布の特徴を見てみる。現府県別に20の世帯クラスター構成を示したものが図2である。「CL8・40代のアップーミドル層が多い郊外地域」は大阪府・兵庫県・奈良県に比較的多く、「CL12・比較的若い製

林裕之  
Hayashi Hiroyuki

はやし・ひろゆき  
(株)野村総合研究所消費サービス・ヘルスケアコンサルティング部、主任コンサルタント。2009年東京大学大学院新領域創成科学研究科修士後、グローバルコンサルティングファームを経て、15年野村総合研究所入社。共著に『なぜ、日本人は考えずにモノを買いたいのか?』がある。

■図3：旧令制国における世帯クラスター構成 | 富裕層が多い摂津、郊外地域の特性が際立つ河内など、地域の特徴がはっきりと浮かび上がる。

No.	エリアタイプ名称	摂津国	河内国	和泉国	播磨国	山城国	丹波国	近江国	大和国	紀伊国
CL1	40代エグゼクティブ層が多く住む都心地域	0.6%	0.0%	0.1%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%
CL2	高学歴なシニア夫婦世帯が多い地域	4.5%	7.2%	5.8%	5.6%	9.1%	2.6%	3.4%	15.8%	1.8%
CL3	高齢夫婦が多く住む郊外地域	1.6%	6.8%	4.1%	7.7%	4.5%	11.4%	5.3%	3.7%	12.8%
CL4	生活を切り詰める高齢三世帯世帯が多い農山村地域	0.0%	0.0%	0.1%	0.6%	0.2%	0.7%	1.5%	0.3%	0.8%
CL5	若い公務員が多く住む郊外地域	8.4%	9.4%	7.4%	4.3%	6.0%	8.4%	5.5%	4.3%	4.2%
CL6	日本における平均的な地域	3.7%	14.3%	14.6%	11.3%	8.4%	5.4%	5.0%	10.4%	23.0%
CL7	三世帯同居が多い地方	0.2%	0.4%	1.4%	2.8%	0.9%	7.9%	4.1%	2.8%	9.4%
CL8	40代のアッパーミドル層が多い郊外地域	12.8%	5.4%	2.7%	3.1%	7.8%	0.6%	2.0%	9.5%	1.6%
CL9	経済的に豊かでないシニア層が多い郊外地域	0.8%	1.7%	4.6%	2.1%	1.1%	10.0%	1.2%	2.6%	14.8%
CL10	小さな子供と住宅ローンを抱えた世帯が多い郊外地域	2.0%	3.1%	5.4%	3.4%	3.6%	2.7%	5.6%	3.0%	1.7%
CL11	核家族世帯からなる平均的な郊外地域	0.6%	6.9%	8.6%	12.9%	4.6%	9.0%	11.3%	9.2%	8.0%
CL12	比較的若い製造業従事者が多い地域	1.9%	3.3%	1.9%	9.6%	2.1%	6.0%	20.8%	3.2%	0.4%
CL13	後期高齢者2人世帯が多い純農村地域	0.3%	0.7%	0.6%	1.4%	1.5%	13.1%	1.7%	3.3%	8.9%
CL14	高齢化が進みつつある郊外地域	0.1%	0.4%	1.2%	8.1%	0.4%	2.9%	11.2%	4.7%	1.3%
CL15	富裕層住宅地	4.3%	1.2%	1.0%	1.0%	10.4%	0.2%	2.0%	2.2%	1.7%
CL16	経済環境が厳しくカードローンニーズも強い地域	14.5%	11.8%	15.8%	6.4%	7.0%	5.5%	2.3%	6.0%	2.1%
CL17	20代単身の借家世帯が多い地域	16.2%	7.1%	3.2%	2.0%	16.4%	2.5%	3.0%	1.6%	2.3%
CL18	共同住宅に住み住宅ローンを抱えた30~40代が多い地域	11.7%	8.3%	6.0%	5.8%	2.7%	2.0%	5.5%	1.6%	1.0%
CL19	若い単身世帯が多く住む都心地域	10.7%	2.1%	1.9%	1.8%	7.1%	3.1%	1.8%	2.2%	0.5%
CL20	10代の子供を抱えた4人世帯が多く住む郊外地域	5.1%	9.8%	13.7%	10.1%	5.9%	5.9%	6.8%	13.5%	3.7%

注：近江国は滋賀県全域、大和国は奈良県全域、紀伊国は和歌山県全域に分布するため、近江国・大和国・紀伊国の世帯分布は図2の分布と一致している  
出所/NRI「マーケット・トランスレーター」をもとに作成

■図4：現府県における世帯クラスター構成 | 濃紫色の部分(■)がCL8のエリアを指し、40代アッパーミドル層世帯の分布が一目瞭然になる。



出所/NRI「マーケット・トランスレーター」をもとに作成

■図2：現府県における世帯クラスター構成 | ある程度地域の特徴がつかめるが、現区分で旧令制国が分断されている場合はその限りではない。

No.	エリアタイプ名称	大阪府	兵庫県	京都府	滋賀県	奈良県	和歌山県
CL1	40代エグゼクティブ層が多く住む都心地域	0.2%	0.6%	0.3%	0.0%	0.2%	0.0%
CL2	高学歴なシニア夫婦世帯が多い地域	4.4%	6.5%	8.0%	3.4%	15.8%	1.8%
CL3	高齢夫婦が多く住む郊外地域	3.6%	4.6%	5.7%	5.3%	3.7%	12.8%
CL4	生活を切り詰める高齢三世帯世帯が多い農山村地域	0.0%	0.5%	0.4%	1.5%	0.3%	0.8%
CL5	若い公務員が多く住む郊外地域	9.3%	5.4%	6.3%	5.5%	4.3%	4.2%
CL6	日本における平均的な地域	8.5%	7.2%	7.8%	5.0%	10.4%	23.0%
CL7	三世帯同居が多い地方	0.4%	2.2%	2.3%	4.1%	2.8%	9.4%
CL8	40代のアッパーミドル層が多い郊外地域	7.8%	10.3%	6.6%	2.0%	9.5%	1.6%
CL9	経済的に豊かでないシニア層が多い郊外地域	1.4%	2.2%	2.3%	1.2%	2.6%	14.8%
CL10	小さな子供と住宅ローンを抱えた世帯が多い郊外地域	2.5%	3.0%	3.5%	5.6%	3.0%	1.7%
CL11	核家族世帯からなる平均的な郊外地域	3.7%	6.1%	5.0%	11.3%	9.2%	8.0%
CL12	比較的若い製造業従事者が多い地域	2.3%	5.1%	2.7%	20.8%	3.2%	0.4%
CL13	後期高齢者2人世帯が多い純農村地域	0.4%	1.5%	3.4%	1.7%	3.3%	8.9%
CL14	高齢化が進みつつある郊外地域	0.3%	3.8%	1.1%	11.2%	4.7%	1.3%
CL15	富裕層住宅地	2.7%	3.0%	8.6%	2.0%	2.2%	1.7%
CL16	経済環境が厳しくカードローンニーズも強い地域	14.1%	10.2%	6.6%	2.3%	6.0%	2.1%
CL17	20代単身の借家世帯が多い地域	13.2%	6.8%	14.1%	3.0%	1.6%	2.3%
CL18	共同住宅に住み住宅ローンを抱えた30~40代が多い地域	10.5%	7.6%	2.5%	5.5%	1.6%	1.0%
CL19	若い単身世帯が多く住む都心地域	7.7%	5.1%	6.6%	1.8%	2.2%	0.5%
CL20	10代の子供を抱えた4人世帯が多く住む郊外地域	7.0%	8.4%	6.3%	6.8%	13.5%	3.7%

出所/NRI「マーケット・トランスレーター」をもとに作成

造業従事者が多い地域」は滋賀県に多く、また「CL17・20代単身の借家世帯が多い地域」は大阪府・京都府に多いなど、現府県別に見てもある程度地域の特徴が示された結果となっている。

ただし、比較的富裕層が多いとされる摂津国は、大阪府と兵庫県に分断されており、図2において「CL8・40代のアッパーミドル層が多い郊外地域」や「CL15・富裕層住宅地」の構成比は大阪府や兵庫県でやや高くなっているものの、その特徴ははっきりしていない。そこで、町丁目単位の世帯クラスターを、旧令制国区分で集計し直すと図3のようになる。旧令制国の分類定義により、近江国は滋賀県、大和国は奈良県、紀伊国は和歌山県の分析結果と一致しているが、それ以外の旧令制国については図2と異なる結果となっている。特に、摂津国に区分される地域では、「CL8・40代のアッパーミドル層が多い郊外地域」が12・8%、「CL15・富裕層住宅地」が4・3%の世帯構成を占め、河内国・和泉国に区分される地域と比較すると富裕層世帯が多いことが分かるだろう(実は図4において、大阪府の北部と兵庫県の東部に濃紫色部分が広く分布しているが、ここが「CL8・40代のアッパーミドル層が多い郊外地域」である)。また、河内国は、同じ大

阪府でも地理的に郊外に位置する地域であるが、河内国では「CL3・高齢夫婦が多く住む郊外地域」「CL11・核家族世帯からなる平均的な郊外地域」「CL20・10代の子供を抱えた4人世帯が多く住む郊外地域」など「郊外地域」を特徴とする世帯クラスター構成が際立つようになる。このように現府県別に見るより、旧令制国別に見た方が地域性をよりはっきり捉えることができる。

**旧令制国別に考える  
エリアマーケットの可能性**

エリアマーケティングがなかなか上手くいかない企業の話聞くが、多くの企業では管理体系の都合から現行政区分別にエリアマーケティングを実施しているのが現状である。現在の行政区分が成立してから100年以上の月日が流れているが、旧令制国は1300年前の奈良時代に遡って、1200年間続いた歴史がある。旧令制国区分で世帯を捉えた方が、よりはっきりと地域の特徴が得られるという事実は、この長い歴史の中で培われた生活習慣や文化が、今の時代にも根付いていることの表れである。地域を旧令制国区分で捉えなおすことによって、より地域の特徴を踏まえた施策や対応が進むことに期待したい。

# 新しい方言の生成——行カンカタ・飲マンカタの生まれるところ

大西拓一郎  
Onishi Takuichiro

自身が育ってきた場所のことばをしばらくぶりに聞くと安心する。

そんな経験をもつ人も多いのではないだろうか。

各地域で話されることば(方言分布)の研究には、柳田国男の方言圏論などが有名だが、現在フィールドワークを中心とした研究が進められ、

その実際のデータから読み取れる新たな事実にも目が向けられている。

まさに学び直しが進む言語地理学の分野から

「ルネッセ」を問う3回のシリーズ。今号では「場」を読み解く。

おおにし・たくいちろう

1963年生まれ。方言学者。現在、国立国語研究所教授。おもな著書に、『ことばの地理学』(大修館書店)、『現代方言の世界』(新日本言語地図)、『空間と時間の中の方言』(いづれも朝倉書店)など。

## ■方言は遠い日の焚き火ではない

方言は、懐かしいふるさとのイメージと直結している。小川のせせらぎにきらきら光るメンドッコ(メダカ)たち、田んぼのわきで摘んだツクシンボー(土筆)の束、クワメズ(桑の実)の甘酸っぱさ、肥やし(ニゴイ)の匂い……。幾多のことばが五感をくすぐる。

ふるさとを離れ、(たぶん)功成名を遂げたあなたの思い出とともに方言はある。しかし、そのふるさとは、今も暮らす人々がいるはずだ。それは年老いた両親だけではないだろう。あなた同様にしわの増えた幼なじみたちは、今も子や孫に、また、かつての同級生たちに、メンドッコ、ツクシンボー……と語り続けている。

年に数回、あるいは何年か何十年に一度しか帰

ではない。その点で、抽象的存在ではあるが、現実には人々の間で共有されるものであり、それがシステム性として現れる。

システムは、合理的で整合性の高い方が望ましい。現実の言語は、理想のシステムにはなっておらず、なにがしかの不合理や不整合を抱えている。不規則動詞や変格活用と呼ばれるものの存在がそのことを如実に示している。

そこで、言語はシステムとして望ましい方向に進もうとする。それがことばの変化である。ことばの変化は、しばしば社会内に動揺をもたらす。一般に変化を起こすのは下の世代。若者である。これに上の世代はカチンときて、ケシカランとなる。しかし、そちらを志向しているのは、ことばにほかならない。矛先を変えるべきだろう。

方言は生きた言語である。生きた言語は必ず変化する。したがって、方言は変化する。ことばの研究において、現実目の前で起こっている変化がとらえられる方言ほど醍醐味のある対象はない。ここでひとこと断っておくが、方言は言語として特異な性質を持つものではない。標準語が崩れた末にあるものではないし、よそ者を寄せ付けない閉鎖的な村人の間で語られる、謎の発音と摩訶不思議な文法で構成された暗号でもない。言語の一般則は、自然言語としての方言にあてはまるし、方言研究の中から言語の通則が見いだされることはしばしばある。方言と言語の間を明確に切り分けることはできない。

## ■ナンダは何だかわからない

「行く」「飲む」のように動作を表す単語は動詞である。その動作を行わないことは、否定と呼ばれる。標準語では「行かない」「飲まない」のよ

らないふるさとの姿は、ずいぶん変わったかもしれない。一変したふるさとのようすが、ことばまで一掃したかのように想像させがちであるが、それは勘違いだ。人々は、あなたに昔と変わらないことばをかけてくれるし、旧友が集まれば、みな、方言で近況を語り、世情をこぼしたりしている。友人たちは、(都会で「花咲かせた」あなたのためにわざわざ昔のことばをかけてくれているのではない。ましてや、(故郷に錦を飾る)あなたのためになつかしさを演出してくれているのではない。

あまりに当たり前のことなので、見過ごしたり、思い違いを引き起こしたりしがちであるが、方言は言語である。方言は言語として、その中核的機能により、地域に暮らす人々が互いに意思疎通するために使われる。生きた人間どうしが、日々の生活のコミュニケーションにおいて欠かすことの

うに「ない」を動詞の後に続けることで否定を表す。動詞の否定の表し方は、全国的には大きく東西に二分され、東日本では標準語形と同じナイが使われるのに対し、西日本ではンもしくはその派生のヘンが用いられる。行カン・行カヘン、飲マン・飲マヘンが西日本の形である。

それでは、その過去形はどのように表すか。つまり、動詞の否定過去形である。文法の中でも基本レベルと考えてよいだろう。標準語の場合は、「行かなかった」「飲まなかつた」のように、「なかつた」が用いられる。現在形の「ない」が「なかつた」になるわけで、これは形容詞の「無い」「無かつた」と平行している。身近な外国語の英語を例にとれば、*did not*を動詞の前に置くだけである。これも *do* や *does* を過去形の *did* に置き換えるだけなので簡単である。過去形の場合は、人称を考慮する必要もないし、動詞は原形のままよい。

古くはどうであったか。日本語には古典(歴史的文献)が多く残されている。それをもとに中世あたりまでさかのぼってみよう。ポルトガル人の司祭ロドリゲスによる『日本大文典』は、キリシタン宣教師による布教のための日本語学習を目的として中世末期(17世紀初頭)に編まれた文法書であり、当時の話しことばをとらえる上で貴重な資料である。そこでは「読まなんだ」のような「なんだ」が否定過去形であるとされている。当時のそのほかの文献でも、この「なんだ」が広く使われていることから、否定過去形の「なんだ」は当時の標準語形だったことがわかる。現在も中部地方から中国地方東部にかけて、行カナンダ、飲マンナンダのようにナンダが用いられている。

問題はこのナンダである。現代標準語における

できない道具が方言である。方言は過去の遺産ではない。方言は文化という見方は、全面的に誤りである。言葉は言われないが、いったんそこから離れて、本質を見つめ直す姿勢は常に必要だ。

## ■方言は変化する

言語は必ず変化する。これは経験則であるとともに理論でもある。変化しない言語は知られていない。正確に言えば、変化しなくなった言語はあるが、それは、例えばラテン語のようにすでに生きていない言語である。生きた言語である以上、方言も変化する。

言語は、システムとしての性格を強く持っている。これは、先に記した意思疎通の道具であることと深く結びついている。「道具」とは言ったものの、目に見えたり、触ったりできるようなものではない。否定現在形と否定過去形は、先にも記したように形容詞と平行してきれいな体系を整えている。ところが、中部地方と西日本の多くで否定過去形のナンダに対する否定現在形はンであり、このナンダという形はどこが否定を表し、どこが過去を表しているのか不明である。そのことは、ナンダが標準語として高い頻度で使われたにもかかわらず、語源が不明ということにも現れている。

## ■(あちこちで)ンカタ誕生!

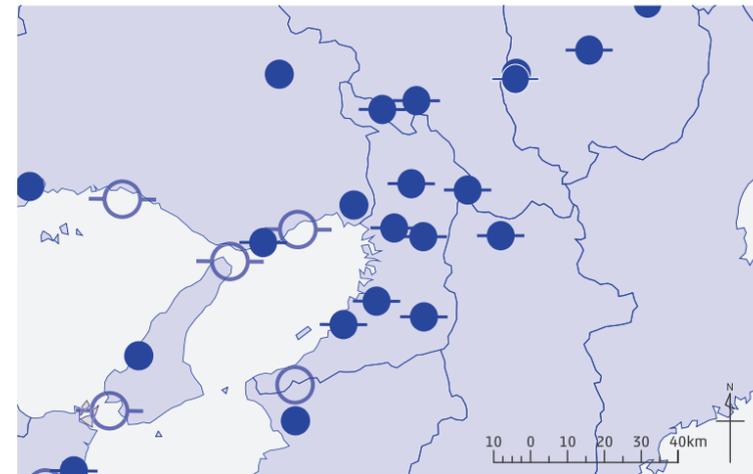
ナンダが抱えていた不分明な構成は整合性に欠くもので、システムとして致命的であった。そのような不具合を抱えたナンダに代わって生み出されたのがンカタである。

動詞は動作を表すと言ったが、動詞の否定は状態になる。「行かない」「飲まない」は動作ではなく、動詞が表す動作を実行しない状態を表している。その点で、状態を基本とする形容詞に接近している。そこで、形容詞の過去形語尾のカッタを取り込むことでンカタが成立した。行カン・行カナンダ、飲マン・飲マンカタは、意味的にも形式的にも合理的かつ整合性を満たしている。なお、動詞の否定形でヘンが用いられるところではヘンカタが採用されたが、ンカタとヘンカタの成立事情は同じである。以下では、ヘンカタも含めて、ンカタとして話を進める。

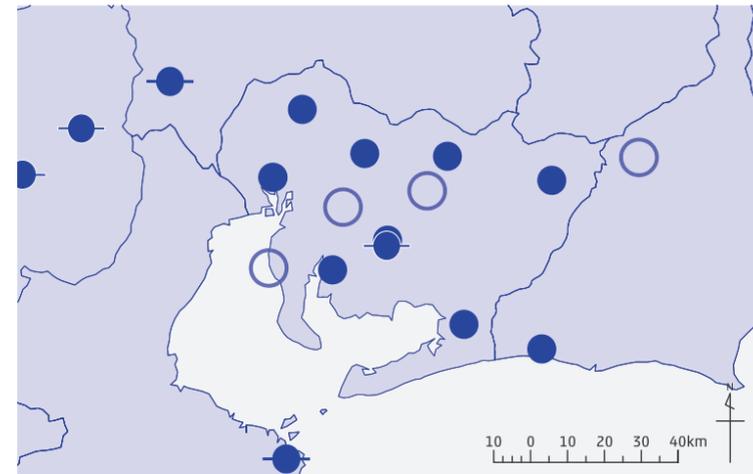
ちなみに、中世前期までの古典語では、動詞の否定過去を表すのに「ぎりき」「ぎりけり」のように「き」「けり」が用いられるが、「たり」を使った「ざりたり」のような形は見当たらない。形容詞の過去形も「たり」ではなく、「高かりき」「高かりけり」のように「き」「けり」で表された。動詞否定形と形容詞の平行関係は、ンカタの成

新語形ンカッタのここ30年の比較分布図 (地域抜粋)

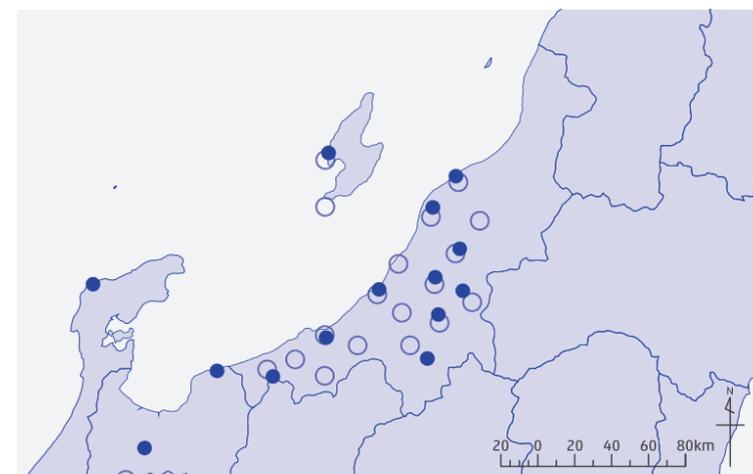
■図1: 大阪府



■図2: 愛知県



■図3: 新潟県



動詞の否定形である「(行か)ない」の過去形「(行か)なかった」の方言の歴史には、「(行か)ナンダ」から、ここ30年の間に「(行か)ンカッタ」「(行か)ヘンカッタ」への変遷がみられる。関西地域特有の方言のイメージが強いが、実際にフィールドワークを行い分布図を作成してみると、愛知の他、特に新潟(北陸地方)には、大阪より先に「(行か)ンカッタ」が生まれ、現在まで安定的に残っていることがわかる。「ことば」の広がり、発生点から波紋のように広がるというそれまでの定説から離れ、独立した地域で必然性によりそれぞれが形成されてきたという「ことばと場」の関係性が実証された。

- 動詞否定過去形:  
 (行か)なかった  
 1980年代(『方言文法全国地図』151図による)
- —ンカッタ
  - —ヘンカッタ
- 動詞否定過去形:  
 (行か)なかった  
 2010年代(『新日本言語地図』72図による)
- —ンカッタ
  - —ヘンカッタ

立と古典語文法の間でも見事に符合している。話を現代の方言に戻そう。関西では、「行カナンダ・飲マナンダ」のようなナンダ形は、古くさく感じられるのではないだろうか。筆者は大阪の生まれでンカッタを習得しているが、7年前に没した父はナンダと言っていた。実際、現在多くの関西人は、行カナンカッタ(行カヘンカッタ)・飲マナンカッタ(飲マヘンカッタ)を使うことだろう。その背景には、前述したようなナンダからンカッタへの合理的移行があったわけだ。

その交替時期は、意外に思われるかもしれないが、つい最近のことである。関西におけるンカッタ(否定過去)の生成・普及はここ30年くらいのできごとなのである。図1は、大阪府を中心とした地域における最近30年間でのンカッタ(ヘンカッタ)の分布変化を示している。約30年前の1980年代初頭、ンカッタの大阪府内における使用地域は和歌山県境の南端に限られていた。それが、30年の間に大阪府全域に広がったことがわかる(この時間間隔は上に記した筆者の経験と適合している)。

このように現在では大阪府全体で広くンカッタが使われるようになっており、そのことが「ンカッタⅡ関西弁」というイメージを醸し出している。ところが、ンカッタの生成・普及は大阪・関西だけのことでない。不分明なナンダを捨てることでンカッタが生み出された事情を忘れてはならない。ナンダが用いられていた方言におけるンカッタの生成は言語的宿命であり、北陸・中部・中国・九州など各地で確認される。図2には、愛知県における30年間の変化を示した。30年前にはまばらだったンカッタが、現在では県内全域で使用されるようになった。

それでは、ンカッタの蜂起は各地一斉だったのだろうか。実は、そこには時間差があり、もっとも早かったのは北陸地方(新潟県上越・中越地方)である。図3が示すように、30年前から広く使用されており、その後も分布は安定していて、あまり変化がない。それどころか、100年前、20世紀初頭に編纂された『口語法分布図』では、すでにこの地域でンカッタの用いられていたことが確認される。ンカッタは関西人だけのものではないし、関西が発生源ですらない。あちらこちらで言語的必然性に応じて、独立して生み出され、現在に至ったものなのだ。

■どこまでも広がらなカッタ

このようにして生成された新語形ンカッタは、分布として地理空間上に領域を形成する。その領域について、図1〜3をもとに見てみると、興味深いことに気づく。

図1では、大阪府をほぼカバーするような分布である。このことは現在の大阪府内であれば、ンカッタを使っても違和感を与えないことを意味する。図2も同様で、愛知県を覆うような分布である。図3では、30年前に新潟県中南部(上越・中越地方)に分布域が形成され、その後、分布はほとんど変わっていない。

このことは、ことばの変化により新たな語が発生した場合、それがどのように広がるのかを如実に示している。すなわち、発生点から波紋状にどこまでも永続して拡大するようなものではなく、一定の範囲をリミットとして領域が形成されるということである。その地理的範囲は、大阪府(図1)や愛知県(図2)のような府県や上越・中越のような一定の地方(図3)であり、これらの事

例が想定させるように、何らかの形で人間の活動を制約する空間領域との間に相関が認められる。今、制約と記したが、正確には必然と言うべきかもしれない。通勤・通学、また勤務地などは、府県や地方といった空間領域により、社会的・制度的に拘束されている。そして、これらの空間領域の中で日々の営みがなされ、コミュニケーションが行われる。冒頭に記したように、その道具がことばⅡ方言であり、その円滑な実現のためには、道具ⅡことばⅡ方言が一致していることが望ましいのは言うまでもない。その結果が、新語形ンカッタの分布領域として、地図上に現れているのである。このように考えるなら、ンカッタは、大阪府や愛知県内に30年間で広がったが、それは30年前に使用(発生)が確認された場所から染み出すようにジワジワと広がったのではなく、現在の領域内を埋めるようにして(おそらく、ある時期、一気に)分布が形成されたのであろう。

ンカッタの展開に関西ナシヨナリズムのシンボリック役割を期待していた方々には、無念かもしれない。そうだとしたら申し訳ないが、ここには間違いなく、タコ焼きもお笑いもタテ鍋も関与していない。

参考文献

- 『日本語学』第18巻13号「新しい方言と古い方言の全国分布——ナンダ・ナカッタなど打消過去の表現をめぐって」(大西拓一郎、1999年、明治書院)
- 『日本語学』第36巻2号「方言の動詞否定辞過去形に見る日本語の重層性」(大西拓一郎、2017年、明治書院)
- 『新日本言語地図』(大西拓一郎編、2016年、朝倉書店)
- 『口語法分布図』(国語調査委員会編、1906年、国定教科書共同販売所)
- 『方言文法全国地図4』(国立国語研究所編、1999年、大蔵省印刷局)

# 大阪はつながっていく

文＝柴崎友香  
Shibasaki Tomoka

画＝浅妻健司

わたしが子供のころによく行っていた公園の片隅には、「近代紡績工業発祥の地」の石碑があった。明治の半ばに、大阪紡績会社ここで操業し、大阪の紡績工業を支える基盤となった。もっとも、中華鍋を傾けたような形の滑り台で遊んでいた当時は、そんな歴史も石碑があることも知らなかったのだが。

紡績工場が発展を続けていた時代、大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれていた。もしくは、呼ばれようとしていた。「煙の都」とも形容されていた(当時の「煙」は誉め言葉である)。現代の大阪の街の形は、そのころに作られた。

今年の2月、日本文学を紹介するイベントに参加するため、初めてイギリスを訪れた。ロンドンの翌日、特急列車で2時間半のマンチェスターでもイベントがあった。熱狂的なファンのいるサッカーチームとロックバンドのストーン・ローゼズやオアシスのイメージくらいしかなかったのだが、駅からホテルに移動するタクシーのほんの5分の道程でビクトリア時代の栄華を今に伝える街の風景に圧倒された。

煉瓦造りの豪華な建物がずらりと並ぶ。それも8階建てや10階建てが多く、前日までいたロンドンに比べても迫力があつた。市庁舎はまるでゴシック

愛想とちょっと強引なくらいの売り込み。台北の古くから続く問屋街、永康街には大阪の船場センタービルにそっくりな布問屋のビルがあつた。売っている布もヒョウ柄にヒョウの顔で、店の人が大阪弁でないのが不思議なくらいだった。

東京に住んで10年が過ぎた。大阪に戻ってきたと実感するのは、新大阪からJR京都線や地下鉄御堂筋線に乗り換えた瞬間である。

車両に入った途端、人の話し声があちこちから耳に飛び込んでくる。その独特の抑揚のせいなのか、明るい色彩の個性的な服装のせいなのか、なんというか、人の輪郭がくっきりしているように感じる。仕事で出会う人も、長い付き合いの友人も、その知り合いで初めて会った人も、たいてい興味深いことを率直に話してくれる。

「東洋のマンチェスター」だったところに造られ、今も数多く残る近代建築も、学校や庁舎などの公共施設や大企業だけではなく、大阪の場合は、個人オーナーの個性的な建物が多い。

大阪を象徴する建物の一つである中央公会堂は、たった一人の実業家が莫大な寄付をして造られた。一時は老朽化で取り壊しの話もあったが、地盤改良までしてよみがえった。高校の合唱大会や咲くやこの花賞の授賞式もここだったので、個人的にも思い入れが深い場所である。

この数十年、大阪はメディアで喧伝されるイメージに自身が縛られてきたように思う。さわがしい、

ク教会のようで、内部は床、壁、天井、窓枠、ドアノブと、これ以上意匠を凝らす場所がないというほど壮麗な装飾が施されていた。隣には巨大なドーム型の閲覧室を中心にした図書館。19世紀、いかにこの街が世界の中で繁栄を誇っていたかを、そして大阪が東洋のマンチェスターに憧れ、目指したこの意味を、やっと心底理解できた。

外国を旅行していると、大阪みたいやな、と思うことが度々ある。

ニューヨークのマンハッタンの基盤の目の区画や一方通行が交互に定められているまっすぐな道路も大阪を思い出したが、街のハード面よりも、やはり人と距離に対して感じる人が多い。ニューヨークのメトロポリタン劇場でチケットの列に並んでいたら、後ろのおばあさんがわたしの携帯の待ち受け画面を見て、猫が好きなのか、うちには2匹いる、と話しかけてきた。エレベーターや信号待ちのわずかな時間にも、見知らぬ人となにかしら話すことは何度もあつた。

わたしが商店街のそばで育ち、家は自営業、自転車ですら15分ほど走れば難波のど真ん中という環境だったせいもあるが、とりわけ、市場的な場所に行くとき、大阪っぽいと思う。ホーチミンの公設市場のごちゃごちゃとした活気や店のおばちゃん

がめついい、などのマイナスのイメージであっても、大阪の人はサービス精神が旺盛なので、その場の期待に応えて、大きめに振る舞ってしまうのである。そうしているうちに、それが本来の自分の姿であると思ひ込んでしまっているところがあるのではないかと感じる。

2年前にオープンしたあべのハルカスの展望台からは、上町台地を中心に発展してきた大阪の街と歴史が一望できる。どこに行っても似たようなものだとたいして期待もせず上ったわたしの先入観を打ち砕いて、まるで空中に浮かんだ感覚で、何時間でも過ごせそうなこの展望台から眺めると、はるかに大陸から海を渡ってきた人や文化がこの場所を交点として古代から行きかっていたのが目に浮かんでくる。

一極集中や経済の停滞など厳しい環境が続いているが、いきなり「東洋のマンチェスター」と大きく打って出た大阪の人の柔軟さはまだ健在だ。現代は当時のようにがむしゃらに規模を拡大するのではなく、街だとか国だとかいう枠を超えて、フラットにいろんな人や場所とコミュニケーションを取れる、おもしろいことができる可能性がある街だと、わたしは思っている。

しばさき・ともか 1973年、大阪府生まれ。生まれ育った大阪を舞台にした小説を数多く執筆。2007年、『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助賞、咲くやこの花賞を受賞。10年、『寝ても覚めても』で野間文芸新人賞受賞。14年、『春の庭』で芥川龍之介賞受賞。



# 「場」を問い直すための10冊

都市は、私たちの暮らしの基盤であり、  
産業・経済・生活文化といった営みのすべてが集約された「場」です。  
そのあり方を問い直し、  
魅力ある「場」をつくるうえで参考となる書籍を選びました。



## 1 『人間の街——公共空間のデザイン』

公共空間デザインの第一人者が、コペンハーゲンやニューヨークなど、世界各都市での実験を踏まえ、デザインの実践理論を体系化した一冊。都市開発がそこに暮らす人々を排除するものではなく、持続可能で健康的かつ安全な、いきいきとしたものであるためには、街に生きる人々の視線を尊重した人間的スケールこそが必要であると主張する。

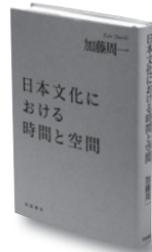
ヤン・ゲール=著 北原理雄=訳  
鹿島出版会/2014年



## 2 『日本文化における時間と空間』

戦後思想史の巨人が時間と空間を軸に日本文化の特質を論じる。絵画や建築、文学等を参照するなかで浮かび上がるのは、島国ゆえに内に向かい、全体を志向しなかった「ムラ共同体」に象徴される精神性だった。著者はそれを「今=ここ」の文化だとして、全体の構造化をせず循環する時間や空間、諸行無常の観念にその本質をみる。

加藤周一=著  
岩波書店/2007年



## 3 『船場大阪を語りつぐ——明治大正昭和の大阪人、ことばと暮らし』

月刊『大阪人』の連載「大阪ことばを語りつぐ」より、船場を中心とした大阪の明治・大正・昭和初期の暮らしが語られた50篇を収録。商いと町の発展のために教育を重んじ、自らの暮らしを律し、ほがらかに平和を愛し暮らす人々の知恵が、大阪ことばでいきいきと語られる。大阪の「本来の姿」を知るための貴重な資料となる一冊。

前川佳子=構成・文 近江晴子=監修  
和泉書院/2016年



## 4 『複数性のエコロジー——人間ならざるものの環境哲学』

無垢な自然環境を理想とする従来のエコロジーは、人間を環境破壊の元凶とみなし、結果的に人間不在の思想に帰着する。型破りなエコロジー論で注目される思想家ティモシー・モートンとの対話と著者自身の内省を通じ、人としての新たな生き方を考える。自分への配慮とヒト・モノを含む他者との結びつきや共存を意識化することを説く。

篠原雅武=著  
以文社/2016年



## 5 『近世大坂の町と人』

産業・経済・文化が花開いた近世大坂の姿を、町の主役町人に光をあて概観する。今も繁華街である道頓堀・千日前など盛り場の成立、大阪大学の前身懐徳堂と適塾の設立、海保青陵や木村兼葭堂といった思想家・文化人などの事象から、それらを生み出した大坂町人の気概と生活文化が浮かび上がる。今の大阪の成り立ちを知る絶好の書。

脇田修=著  
吉川弘文館/2015年



## 6 『ポートランド——世界で一番住みたい街をつくる』

全米で最も住みたい街に選ばれ移住者が増え続けるポートランドの施策を開発局勤務の著者が紹介。景観保全と産業・住宅開発のバランス、交通・水道・オープンスペースをひとつの環境システムと捉えたエリア開発、コミュニティを形成する市民や企業の都市計画への参加など、人口減少・産業縮小に悩む日本の市町村へのヒント満載の一冊。

山崎満広=著  
学芸出版社/2016年



## 7 『日本の風景・西欧の景観——そして造景の時代』

フランスにおける日本学の第一人者にして著名な文化地理学者による風景の比較文化論。「山水」や「借景」のような自然と融合した東洋の視点が、自然と人間の二項対立を超えるべく模索されてきた西洋の空間と出会うとき、環境との豊かな調和が生み出されると説く。これからの都市や自然環境のあり方を考えるうえでも必読の書。

オギニスタン・ベルク=著 篠田勝英=訳  
講談社現代新書/1990年



## 8 『風土——人間学的考察』

アジアからヨーロッパに至る地域をモンスーン・砂漠・牧場と3類型し、民族・文化・社会の特質について考察する独自の比較文化論は、今も議論を呼ぶ力作。風土を単なる自然環境と捉えず、人間の精神構造のなかに刻みこまれた自己了解のしかたであるという基底から、外と内をわける「家」の捉え方や芸術論など豊かな発想力もおもしろい。

和辻哲郎=著  
岩波文庫/1979年



## 9 『パサーージュ論 第3巻』

ユダヤ人思想家ヴァルター・ベンヤミンがパリ亡命時に綴ったメモをまとめた近現代社会分析の古典。19世紀前半のパリに生まれたアーケード街「パサーージュ」を対象に人間の欲望やユートピア、時代精神を考察する。第3巻はその思想的-method論であり、近代と都市を読み解く概念である「遊歩者」の認識を綴った断章を収録。全5巻。

ヴァルター・ベンヤミン=著  
今村仁司、三島憲一ほか=訳  
岩波現代文庫/2003年



## 10 『東京の空間人類学』

近代都市を乱開発と非難するのは簡単だ。筆者は、江戸の古地図を辿る丹念なフィールドワークで、東京の深層に今もなお息づく江戸の都市空間の名残りをこまやかに拾い歩く。「その場所」がもつコンテキスト(文脈)を大事にし、計画・設計されていた都市構造を、建築史家が専門的視点で解説。都市学の定番書として今後の都市づくりのヒントに。

陣内秀信=著  
ちくま学芸文庫/1992年



## 「CEL」バックナンバー



vol.115 2017年3月発行

特集  
外に出て「日本」を見直す



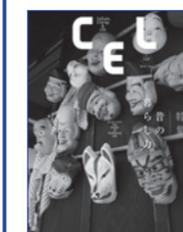
vol.114 2016年11月発行

特集  
外から「日本」を見直す



vol.113 2016年7月発行

特集  
学びを学ぶ



vol.112 2016年3月発行

特集  
昔の暮らしカ



vol.111 2015年11月発行

特集  
生活者から見る「スマート」



vol.110 2015年7月発行

特集  
幸せな地域の暮らしをつくる

## CELホームページ

<http://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容、「CEL」バックナンバーをご覧になれます。  
※CELホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。

## Facebookページ

<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

## CELからのメッセージ その場所に、なぜそれがあつたのか?

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長  
池永寛明  
Kenaga Hiroaki

ある国の領事からこんな話を聞いた。「日本人は『源氏物語』を紫式部が書いたことは知っているが、『紫式部がなぜそれを書いたのか、その時代の背景はどうだったのか?』とお訊きしても答えがない。」

神戸に外国人居留地があつたことを知っていても、なぜ神戸につくられたかには関心をしめさない。大坂は「天下の台所」だったが、文化・観光都市でもあつた。記念碑や再現施設を訪ね街歩きする人が多いが、なぜ歌舞伎や浄瑠璃が上方で生まれたのか、なぜ当時の人が支持したかというコンテキストを理解していない。

かつてここに城があつた、堀があつたとか「モノ」ばかりが着目される。その場にそれがあつたこと、なくなつたことには「必然」がある。しかし前後の「必然」が風化し、場の記憶から欠落してしまっている。

現代人は「過去よりも現代が進歩している」という文明観を抱きがちである。「新しいもの」進歩したもの」と捉え、過去は古いもの、レベルが低いものと過小評価しがちである。たしかに技術や道具は進歩したが、やろうとしていること自体は過去と現代でもなんら変わらない。

たとえば築城や川の流れを変えるなどの土木事業を、現代の設備や道具を用いずに実現している。パソコンがなかった江戸時代の両替商は複雑な金利計算をこなしている。物理学や天文学、高等数学を海外からも学び身につけ、「技」では現代より進んでいたのではないだろうか。とりわけ江戸時代の築城や都市計画、都市インフラづくりなどを見ると、全体像をつかむ力や、運営システムや体制、仕組みは現代よりはるかに優れた力があつたのしか考えられない。

現代の日本の課題は、過去の本質が現在に繋がっていないこと、コンテンツの追いかけてコンテキストが理解されていないこと、内向きで外の変化に目を向けなくなったことではないだろうか。

だから表層的となり、流動化する。あらゆる事柄が、これまでの価値観や社会制度やルールと「適合不全」となり、今まで考えられなかったことが起こる。それが、これまで依って立ってきたことに對する「喪失感」を引き起こしている。

116号より3号連続で、過去と現在の時間軸を繋ぎ直し、内と外とを重ね合わせ、その場が持っていた必然的な本質を発掘して、「ルネッセ(再起動)」していく方法論を考えていきたい。



1920年代の神戸・外国人居留地の様子を伝える絵葉書  
写真/AFLO



日本橋四方延脚位之通法方  
家氏繪 十丁 西川繪 十丁 通行繪 三  
吉澤繪 一丁 龜井繪 三丁 藤原繪 二  
西園繪 十六丁 細島繪 十丁 白鳥繪 二  
四谷繪 十丁 日吉繪 十丁 内藤繪 五  
市谷繪 三丁 十三社 三丁 西村繪 五  
木谷繪 二丁 五山繪 三丁 元次繪 五